

3章 保存活用区域・関連文化遺産群の考え方

1. 「保存活用区域」および「関連文化遺産群」とは

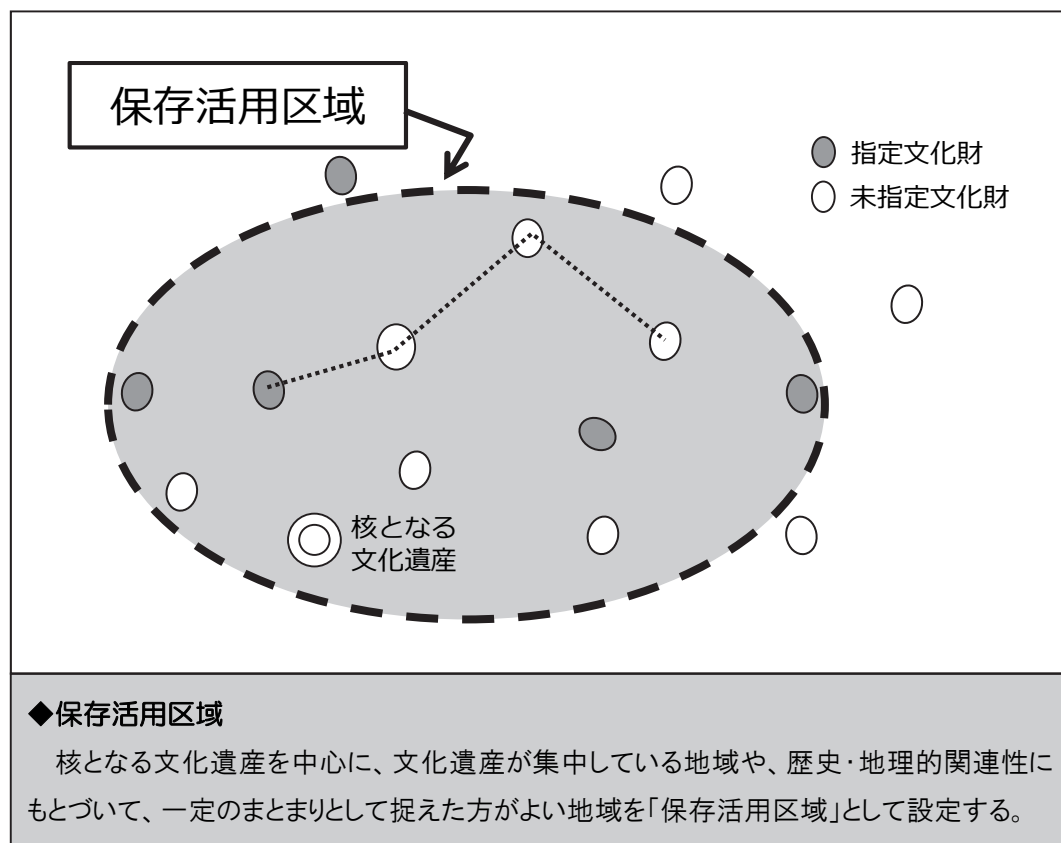
(1) 保存活用区域とは

保存活用区域とは、不動産である遺産や有形の文化遺産だけではなく、無形の文化遺産も含めて、様々な文化遺産が特定地域に集中している場合に、関連文化遺産群や個々の文化遺産を核として歴史文化的な空間を創出するための計画区域のことである。単体の文化遺産だけでなく、文化遺産と一体となって価値を形成する周辺環境も含めて保護するものであり、都市計画法や景観法などの制度を活用しながら、調和のとれた空間整備を目指す区域である。

ただし、保存活用区域は、文化遺産保護のために規制する区域ではなく、文化的な空間を創出している、あるいは創出するために定める区域であることに留意する必要がある。歴史的・地域的関連性にもとづいて一体的に捉えるべき区域をあらかじめ定めることによって、その後の歴史文化をいかしたまちづくりを推進しやすくするために設定する区域である。

保存活用区域を設定することにより、文化遺産が所在する地域の住民や町民が、地域の文化遺産を再認識し、地域への関心と愛着心を高めるとともに、文化遺産の保存・活用に主体的に加わることが期待される。

図 保存活用区域のイメージ



（２）関連文化遺産群とは

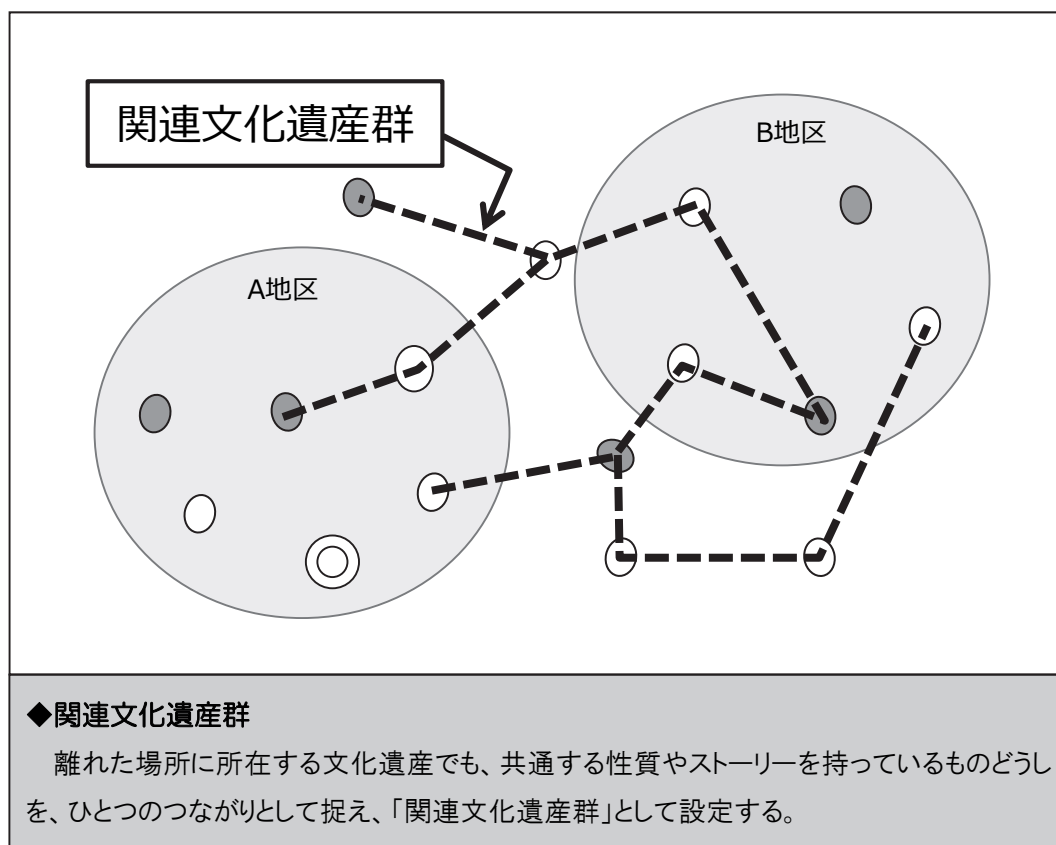
これまで文化遺産は単体で取り扱われることが多く、その保存・活用についても単体で行われが多かったという課題に対して、文化庁は「関連文化財群（※本構想では関連文化遺産群という）」という捉え方を提示している。

関連文化遺産群は、文化遺産を歴史的・地域的な関連性などにもとづき、相互に関連のある一定のまとまりとして捉えて、総合的に保存・活用していくことを目的としたものである。地域の歴史文化の特徴を物語るテーマやストーリーに関連する文化遺産を、群として捉えることに特徴があり、そのことによって文化遺産や対象地域そのものに対する理解を促進することができる。

また、関連文化遺産群は、地域の歴史文化の特徴にもとづいたストーリーだけではなく、活用の視点から設定することや、文化遺産を支える技術や人々にまで拡大して設定することができる。

関連文化遺産群を設定することにより、地域の文化遺産が周辺環境を含めて総合的に保存・活用され、文化遺産の魅力を高めるとともに、魅力的な形で分かりやすく価値を伝えていくことが期待される。

図 関連文化遺産群のイメージ



(3) 保存活用区域と関連文化遺産群のメリット・デメリット

保存活用区域および関連文化遺産群は、どちらも地域の文化遺産をより分かりやすく伝え、その価値と魅力を高めるために設定するものであるが、それぞれ歴史文化をいかしたまちづくりを進めていくにあたって注意が必要な点が存在すると考えられる。下記に簡単に整理する。

表 関連文化遺産群および保存活用区域のメリット・デメリット

	特徴	利点(メリット)	注意点(デメリット)
保存活用区域	歴史・地域的関連性にもとづいて、一定のまとまりで捉えた方がよい地域を区域として捉える。	• 周辺の環境や景観を一体的に保存・活用することができる。 • 地域に潜在している文化遺産がその価値を見出されないまま失われていくことを未然に防ぐ。 • 地域住民が保存管理の主体になることによって、文化遺産に愛着をもたせ、地域への関心を高めることができる。	• 核となる文化遺産がない、または文化遺産の数が少ない地域では設定しにくい。
関連文化遺産群	テーマやストーリーにもとづいて、関連する文化遺産同士を群として捉える。	• 「テーマ」や「ストーリー」を持たせることにより、地域の文化遺産の価値を魅力的な形で分かりやすく人々に提示することができる。 • 複数の地域にまたがった文化遺産同士のつながりや関連性を示すことで、文化遺産の特性を把握しやすくなる。 • 潜在している文化遺産がその価値を見出されないまま失われていくことを未然に防ぐ。	• 複数の地域にまたがる場合、地域によって捉え方が異なる可能性があるため、保存管理の主体が不明確になるおそれがある。

2. 保存活用区域と関連文化遺産群の設定の考え方

（１）保存活用区域と関連文化遺産群の設定にあたって

本構想においては、保存活用区域および関連文化遺産群を検討するにあたって、下記のとおり方針を定める。

基本的な考え方① 西原町における歴史文化の特徴が把握しやすい設定を行う

西原町の歴史文化は、金丸が住んでいたという代表的な特徴にはじまり、沖縄戦の傷跡を残す地であることや、首里の近接地であり稲作が盛んだったこと、稲作に付随するまつりや行事が伝わっていることなど、大きく8つの特徴に整理できる。この特徴にもとづき、西原町における歴史文化の価値やユニーク性が、町民および町外の人々へより伝わりやすいという視点から、保存活用区域および関連文化遺産群の設定を行う。

基本的な考え方② 保存活用計画・関連文化遺産群の利点をいかせる設定を行う

前ページで整理したとおり、保存活用区域および関連文化遺産群には、それぞれ運用にあたってのメリットとデメリットが存在する。文化遺産は、その価値が保存・継承されていくことに加え、地域住民から親しみを持たれ、人々の生活と関わりながら活用されていくことが大切である。そのため、保存と活用をより促進するという視点から、それぞれの利点をいかした保存活用区域および関連文化遺産群の設定を行う。

基本的な考え方③ 町内全域をカバーする

本構想においては、西原町全域で歴史文化の機運を高めるため、可能な限り、すべての町域において、保存活用区域および関連文化遺産群のいずれか（あるいは複数）が設定されるよう留意する。自らの区域が位置づけられることにより、町民自身が西原町の歴史文化について興味を持ち、歴史文化を保存・活用していく気運の高まりに資することを期待する。

基本的な考え方④ 今後も追加・見直しを行う

本構想では、西原町の歴史文化の特徴を踏まえて保存活用区域および関連文化遺産群を設定するが、これは代表的な特徴をモデル的に設定したものであり、今後不変のものというわけではない。今後も歴史文化に関する調査研究の進捗や、町民の気運の醸成にあわせて、追加や見直しを行うものとする。特に、本構想にもとづいた各種事業が行われることにより、町民が地域の文化遺産を再認識し、新たな保存活用区域や関連文化遺産群を提案してくれることを期待する。

（２）保存活用区域の設定

保存活用区域は、西原町の歴史文化的特徴を踏まえて、ひとつのまとまりとして捉えた方がよい区域を設定する。核となる文化遺産を中心に、文化遺産および周辺環境が一体となって価値をなす文化的な空間の創出を目指す。

保存活用区域は、字や行政区単位での設定が中心になると考えられることから、地域住民が主体となって保存管理などに取り組むように推進を図る。また、周辺環境を含めた文化的な空間の創出を目指すため、「西原町都市計画マスタープラン」や「西原町景観計画」などの関連計画と連携を図っていく必要がある。

先述までの保存活用区域の利点などを踏まえ、保存活用区域を下記のとおり設定する。なお、これ以外の地域においても、今後地域の意向を踏まえながら保存活用区域の追加を検討する。また、金丸（尚円王）ゆかりの地関連文化遺産群＋保存活用区域は、関連文化遺産群としての特徴と保存活用区域としての特徴をあわせ持つものであることから、両方に位置づける。

表 西原町における保存活用区域

区域名	範囲
幸地グスク周辺保存活用区域	幸地・翁長・小波津を中心とした周辺地
棚原区周辺保存活用区域	棚原を中心とした周辺地
運玉森周辺保存活用区域	我謝・安室・桃原を中心とした周辺地
金丸（尚円王）ゆかりの地関連文化遺産群 ＋保存活用区域	嘉手苅・内間周辺地（重点区域）

（３）関連文化遺産群の設定

関連文化遺産群は、西原町全域を対象に、それぞれの文化遺産が有する歴史的・文化的つながりや地域的関連性を踏まえて設定する。設定にあたって、個々の文化遺産の歴史的・文化的な関連性をより明確にするために、ストーリーを設定して文化遺産の捉え方を示す。また、町内全域という広範囲で関連文化遺産群を抽出することによって、これまで取り上げられなかった地域の文化遺産を新たに取り上げることを目指す。

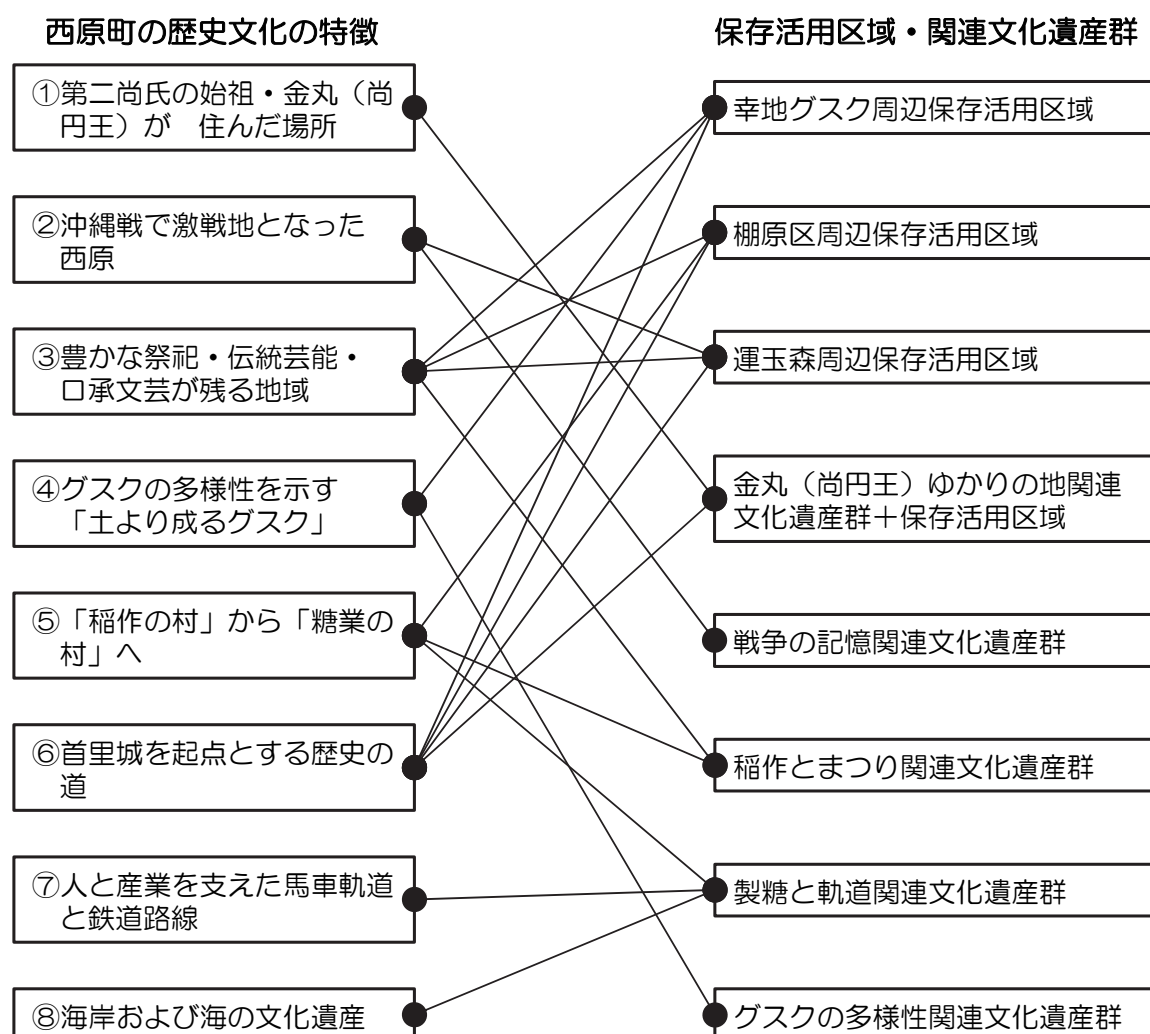
先述までの関連文化遺産群の利点などを踏まえ、本構想においては関連文化遺産群を下記のとおり設定する。なお、これ以外のテーマにおいても、今後町民の意向を踏まえながら関連文化遺産群の追加を検討する。

また、金丸（尚円王）ゆかりの地関連文化遺産群＋保存活用区域は、関連文化遺産群としての特徴と保存活用区域としての特徴をあわせ持つものであることから、両方に位置づける。

表 西原町内における関連文化遺産群

文化遺産群名	範囲
金丸(尚円王)ゆかりの地関連文化遺産群 ＋保存活用区域	町内全域
戦争の記憶関連文化遺産群	町内全域
稲作とまつり関連文化遺産群	町内全域
製糖と軌道関連文化遺産群	町内全域・兼久・我謝・小那覇
グスクの多様性関連文化遺産群	幸地・棚原・千原・小波津

図 歴史文化の特徴と、保存活用区域・関連文化遺産群の関係



3. 西原町の保存活用区域の位置づけ

(1) 幸地グスク周辺保存活用区域

①ストーリー

幸地は、町内でも古い集落のひとつで、かつては「城村」、「熱田村」、「東風平村」に分かれていました。城村はグスクの北東側に、熱田村は小字安津田に、東風平村は東風平原にあったと伝わっています。幸地という地名は、17世紀中頃に作成された『琉球国高究帳』に「廣地村・おなか村」と併記で登場するのが最初です。『琉球国由来記』には、現在と同じく「幸地村」と記載され、「は かうち原」と刻字された印部土手石も残されています。

西原町は、かつては西原間切として首里王府の直轄地であったため、間切を代表するいわゆる同村（ドゥームラ）というものがありませんが、西原間切の地頭家が幸地親雲上と呼ばれたことから、幸地が西原間切の拠点地域だったのではないかと考えられます。

集落内には幸地グスクという核となる文化遺産が所在し、グスク内には、首里城と中城城跡を結ぶ歴史の道が通っているほか、グスク南側には古番所跡と呼ばれるところがあります。また、集落の南西にある刻時森は、蔡温が古波津里恒らに命じて、日影と漏刻との関係を観測させたところで、古くより首里王府とのつながりが感じられる地域であるといえます。

●グスクにまつわる伝説

むかし、西原の幸地城の主である熱田子は、戦略武勇の達人で誰もが恐れていました。熱田子は、隣の津記武多按司と親しくしていましたが、按司の奥方の美貌にほれていました。

ある日、熱田子は、魚釣りの帰りに、その奥方が亭良佐井で髪を洗うのを見て、尻をなでていたずらをする、奥方は怒って、そのことを夫である按司に告げます。按司は非常に立腹し、熱田子を殺害しようとしたが、相手の力は侮り難く、攻め入る機会をうかがっていました。そのことを耳にした熱田子は、謀士を招き入れ協議し、早めに津記武多按司を滅ぼすことを決めます。さっそく熱田子は、按司は酒宴を設けて観持し、宴もたけなわのころ、熱田子が按司に「按司は宝剣をお持ちのこととうかがっております。是非、拝見させて下さい」と申し出て、宝剣を手にするや、その剣で按司を斬り殺し、家臣らも皆殺しにします。しかし、その奥方は殺さず自分のものにしようとしたが、奥方は、井戸に身を投げ、自殺します。

そのことを聞いた今帰仁按司は非常に怒り、自ら討伐軍を率いて幸地城に急攻しました。幸地城の兵は少なかったため、熱田子は一計を案じて自ら城を出て今帰仁の大軍を入城させ、大いに酒席を設けてその遠征の労をねぎらいます。有頂天になった今帰仁軍は大酔します。熱田子は、事前に兵を翁長村の北山に潜伏させていたので、大酔した今帰仁軍は、難なく討ち殺されました。今帰仁按司もそこで殺害されたので、ここを「今帰仁山」と呼ぶようになったといえます。

今帰仁按司の家臣に4人の大将がいて、4人は按司の仇討を誓い、大軍を率いて幸地城の熱田子を攻め、ついに討ち亡ぼしました。熱田子の墓は、石嶺御嶽の東にあつて、その子孫らは翁長村に住み、その墓を守っていると伝わっています。（『球陽 外巻 遺老説伝』）

●祭祀と芸能

幸地の聖地として『琉球国由来記』に、ヒガワノ嶽、石嶺ノ嶽、城之火神、名幸之殿、幸地城之殿、幸地巫火神の記載があります。なかでもヒガワノ嶽は、正月元旦に王に献上する水を汲む吉方の井戸のひとつと位置づけられていました。

年中行事としては、ニーセージナやウファチジナといった綱引きや、村遊びなどが行われています。村遊びは子年と酉年は特に盛大に行われ、獅子舞や組踊などが演じられます。

上記のことから、幸地グスクを中心として、伝説や様々な文化遺産が伝わる幸地の地域を、ひとつの保存活用区域と捉えます。

②主な文化遺産

幸地グスク周辺保存活用区域の主な文化遺産は、下表のとおりである。

表 主な文化遺産

名称	概要	写真
幸地グスク (幸地 102)	【分類】: 官公庁・政治関連 - 西原町の西部に位置し、標高約100mの丘陵上に所在する。 『琉球国由来記』には「幸地城之殿」が祭祀場と記されている。 - 城主・熱田子の伝承が伝わる（『球陽 外巻 遺老説伝』）。 『西原町史 第5巻 西原の考古』では、幸地グスクについて、15世紀前半につくられ、その後数十年間グスクとして、あるいは関所として、また戦乱期の後には領地内支配の拠点的な機能も複合的に期待された形で存在した可能性があるとしている。 - グスク内にはビージルと呼ばれる霊石が祀られている。グスク斜面に位置する平坦地に遊び庭がある。グスク内を通る道は、馬場として利用された。	
幸地按司墓 (幸地 69)	【分類】: 墳墓並びに碑 - 幸地グスクの城主・熱田子の墓といわれている。 - 丘の頂上部を形成している琉球石灰岩の岩陰を巧みに利用して造営されたもので、岩陰の開口部は石積みによって閉じられている。	
フルバンガー (幸地 37)	【分類】: 集落関係 古番所井とも。この場所に西原番所があったといわれている。	

名称	概要	写真
くくじむい 刻時森 (幸地 19)	【分類】: 教育・文化・社会生活 - 幸地集落南西にある標高142.7mの小高い丘。 - 蔡温がこれまでの漏刻の法が不正確なので改正しようとして、古波津里恒らに命じて、日影と漏刻との関係を観測させたところである。	
幸地樋川 (幸地 30)	【分類】: 集落関係 首里城では、元日の朝、吉方の井泉から汲んだ水を、辺戸の水とともにウチュクイノ阿武志良礼が王に献上した。『琉球国由来記』によれば、吉方の水は主に首里近郊に散在する9か所の井泉から汲んだもので、西原町では、首里城から寅の方位（東北東）にあたる幸地樋川が選ばれたという。	
綱引き (各地)	【分類】: 芸能 - ウファチジナ(御初綱)とニーセージナ(ニオ綱)の2種類があり、ニーセージナは現在でもカドウで行われている。 - 綱は雄雌違う場所で作っていたが、現在はどちらも児童公園でつくる。かつてはウシリーと呼ばれる役割があり、子どもたちが各戸から綱を編むための茅などを集めていたという。	
村遊び (各地)	【分類】: 芸能 - 稲の収穫を終えた旧暦8月15日に、村の神々に五穀豊穡を感謝し、豊年を祈願するためにアシビナー(遊び庭)などで演じられる奉納舞踊である。 - 幸地では獅子のウトウイムチといい、獅子をもてなすため、「長者の大主」や雑踊、獅子舞など、様々な芸能が演じられる。 - 特に村遊びについては、幸地において芸能が盛んになった由来・いい伝えが残されているほか、幸地独自の踊り「踊り天川」が継承されている。 『西原町史 第4巻 民俗編』では、幸地の芸能の由来として、次の伝承を収録している。「三百年程前、幸地の村が大変豊かになりすぎて、誰も他人の使用人になる者が無く、困った状態になった。そこで、富を浪費させるために三年間仕事をする事を禁止し、村遊びばかりをさせた。そのために、村遊びが大変上手になり、読谷村の楚辺あたりまで興行をして巡ったという」	
ハル石 (各地)	【分類】: 生活関連 - 高さ66センチメートル×幅30センチメートル×厚さ6センチメートルの砂岩製のハル石。 - 個人の私有地で発見されたが、もともとは畑と道路との境界付近の土手の上に立っていたという。 「は かうち原」と刻字されている。	

名称	概要	写真
あつたしー 熱田子の伝 説	【分類】 :口承文芸 熱田子は、隣の津記武多按司といさかいを起こし、その一族を滅ぼした。さらに討伐軍を率いた今帰仁按司も討ち取ったため、その後、今帰仁按司の4人の息子に滅ぼされた。	—

※名称後ろの数字は、文化遺産IDである。

③今後の取組方針

ア. 域内文化遺産の調査研究の推進

- 所在や由来などが分かっていない文化遺産や、幸地グスクや歴史の道、番所跡地などの保存活用のための整備が必要な文化遺産について、調査研究および記録保存を促進する。
- 村遊びや綱引きといった芸能・年中行事についても、映像記録の作成や、関連道具類の作成技術などもあわせて調査記録を進めていく。

イ. 活用・発信に向けた文化遺産整備の推進

- 幸地グスクや歴史の道、その他の文化遺産について、字幸地と意見交換を行いながら、整備に向けた取組を推進する。また、文化遺産の活用に向けた誘導サインや解説板、駐車場など、必要と考えられる周辺環境の整備を検討・推進する。

ウ. 若い世代への歴史文化の継承の推進

- 幸地グスク周辺ワークショップであげられた課題として、地域の若者の年中行事などへの参加率の低さがある。幸地グスク周辺保存活用区域では、地域有志による獅子舞保存会などの会が組織されており、このような活動を盛り上げていくための支援を行う。
- 学校教育と連携して、郷土の年中行事や伝統芸能を学ぶ機会を設けるなど、子どもが地域の歴史文化に興味を持つきっかけとなる仕組みを構築するとともに、他地域から幸地へ嫁いできた女性や、移り住んできた新住民を巻き込む仕組みづくりを支援していく。

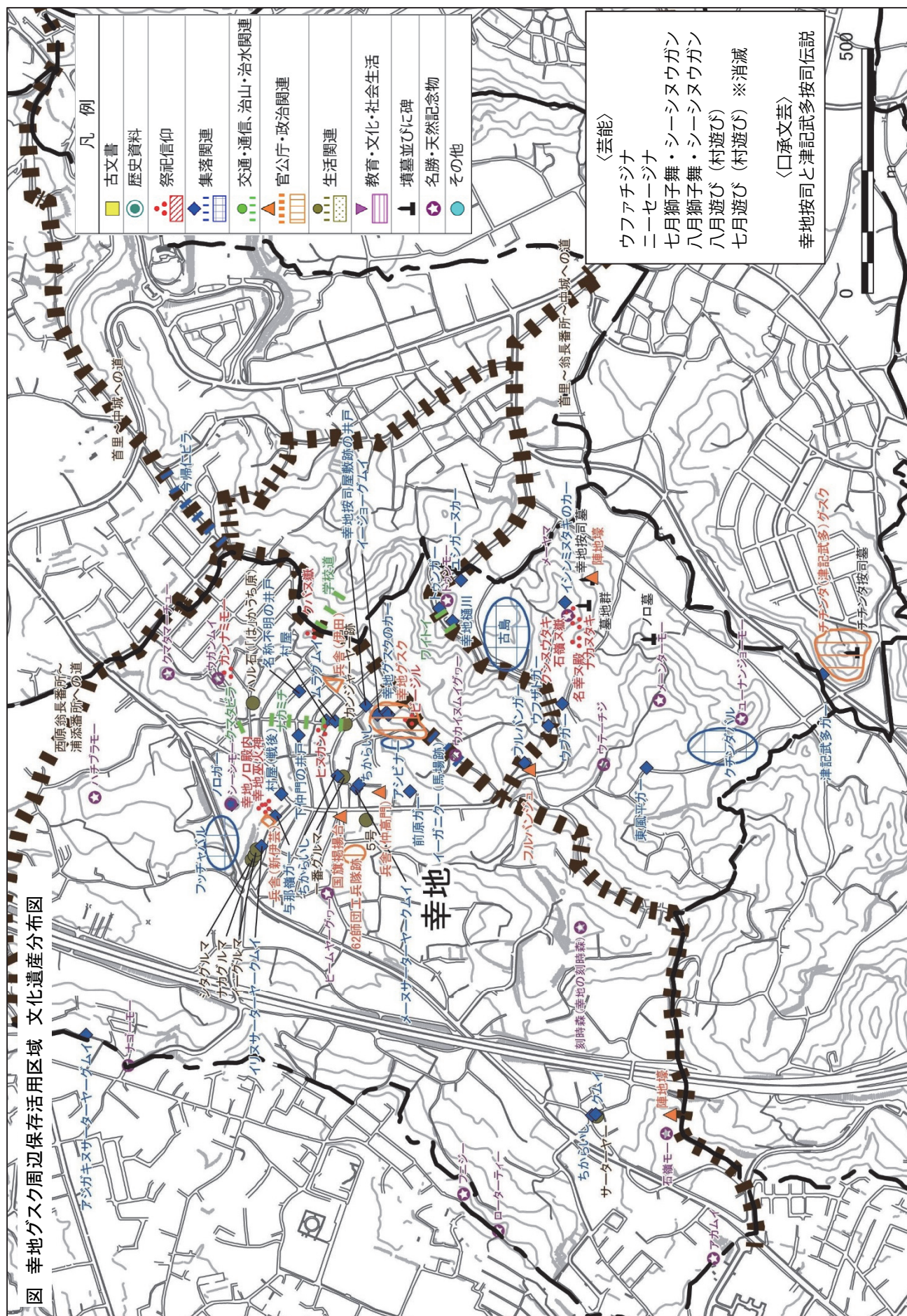
エ. 地域で文化遺産を保存・活用する体制の構築

- 幸地自治会や獅子舞保存会などを中心に、文化遺産の保存・活用を検討する委員会の結成などを支援する。

オ. 保存活用区域の情報発信（町内含む）の推進

- 幸地グスク周辺保存活用区域の魅力や歴史文化の価値を町内外に発信するため、文化遺産マップの作成や、散策コースの設定、町ホームページなどを通じた情報発信を行う。
- 村遊びなどの芸能についても、開催予定や地域ごとの内容の違いなどを町外へ広く発信する仕組みを検討する。

図 幸地グスク周辺保存活用区域 文化遺産分布図



（２）棚原区周辺保存活用区域

①ストーリー

棚原は、17世紀末から18世紀初頭に浦添間切から編入された集落であり、他の集落とは異なった歴史をもっています。「棚原」という地名は、棚状の段々畑の地形に由来するといわれており、かつては水田が多く、棚原コージャー米の生産地であったといえます。

棚原は、幾度か集落移動が行われており、「日本から来た測量官」の勧めによって、平地にあった集落を現在の斜面地に移したという伝承が残っています。

また、粘土質のジャール土壌が広がる西原町において、琉球石灰岩が分布する数少ない地域である棚原は、他集落にはみられない石造の文化遺産が所在する特徴的な地域です。旧宮里家屋敷跡や石畳道などは、琉球石灰岩を産する棚原ならではの文化遺産といえるでしょう。先史時代の遺跡である棚原グスクも石灰岩上に位置しており、『おもろさうし』に「棚原のてだ」という有力な首長の居城であったことをうかがわせる謡が記されています。

●棚原山（杣山）

近世には、王府によって管理された杣山（現在の字千原と字上原・現琉球大学敷地）は、初めて本格的製茶を行うための茶園がつくられた場所でもあり、棚原山の2万坪余を開拓し、茶樹や杉、檜などが植えられたとされています。杣山一帯の植生は山原と似ているため、イタジイやヤマモモが自生し、その実は山入りして自由に食べられていたといえます。現在は琉球大学キャンパスが立地していますが、周辺の自然に当時の名残を見ることができます。

●ミルク神と土帝君

豊年を運んでくる「棚原のミルク」は、首里の赤田から伝えられたとされており、12年に一度「まーるあしび」が酉年の旧暦8月13～15日の3日間、盛大に行われます。酉年に行うのはミルク加那志が酉年生まれであるためで、その誕生を祝い、ミルク踊を中心に世果報を祈願する行事です。

さらに、棚原は西原町内で唯一、土帝君が祀られている地域です。この「棚原の土帝君」は首里のニシムイ（那覇市首里儀保付近）からフトウキ（仏＝土帝君）を持ち帰ったことが始まりとされています。

●棚原のことば

棚原のことば（タナバルムニー）は「ニーアギサンサギ」といわれる独特のイントネーションであったといわれています。

このように棚原区周辺は、西原町のなかでも特徴的な地域といえます。よって、棚原区周辺地区はひとつのまとまりとして捉えることが重要であると考えられ、保存活用区域として位置づけられます。

②主な文化遺産

棚原区周辺保存活用区域の主な文化遺産は、下表のとおりである。

表 主な文化遺産

名称	概要	写真
棚原のミルク (棚原 133)	【分類】: 芸能 - 棚原のミルク(弥勒)信仰は首里の赤田から伝わったとされ、ミルクの仮面などは棚原ノロ殿内の祭壇に祀られている。 - 酉年の旧暦8月15日には、ミルクの仮面を頭から被り、神衣装を着け、世果報を祈願するミルク踊りを行う。 - 旧暦12月20日には“ウマリトウイタティ”と称して、この年に生まれた赤子らの誕生をミルク神に報告し、健康を祈願する。	
棚原グスク (棚原 117)	【分類】: 官公庁・政治関連 - およそ14～15世紀に属するグスク跡で、標高130～150mの石灰岩丘陵上に位置する。 『琉球国由来記』にみえる「棚原城之殿」の平場が、棚原グスクの主郭と思われる。 - 自然の難所をうまく利用してつくられたグスクである。グスク北側では、戦後に採石が行われた。	
棚原貝塚 (棚原 78)	【分類】: 集落関連 - 縄文時代後期～晩期相当期の遺跡で、遺物として縄文時代後期の土器などが採集されている。 - 海の貝よりも陸の貝類が多く、貝塚でも前期のもののみみられる。 - 鍾乳石でできた変形楕円体の装飾品らしきものが発見されている。	
とうていーくん 土帝君 (棚原 77)	【分類】: 祭祀信仰 - 棚原ノロ殿内下側の比嘉家敷地内に所在する。 - 比嘉家の当主が200年ほど前に、首里のニシムイ(那覇市首里儀保付近)からフトウキ(仏=土帝君)を持ち帰ったのが始まりとされる。 - 五穀豊穡と子孫繁栄の神とされる土帝君は、かつて旧暦2月2日のクスッキーと5月5日のゲンゲアチャーに祭祀が行われていたが、現在は旧暦の2月2日のみ行われている。	
石畳道 (棚原 24)	【分類】: 集落関連 - 道幅が1.8m、長さ約27mの琉球石灰岩を素材につくり上げられた石畳道である。 - 西原町内で石畳道が残されているのは棚原集落のみとなっている。 - かつて東西の石畳道を境にして上下に組分けして、綱引きが行われており、石畳道の近くに雄雌	

名称	概要	写真
	の綱を合体させるカニチグチがあった。 以前は周辺に竹や木々が生い茂り、風情があったが、開発などにより景観が変化しつつある。	
棚原旧宮里家 屋敷跡 (棚原 114) [町指定史跡]	【分類】: 集落関連 - 屋敷に隣接する道や、屋敷入口へつながる道は石畳敷となっている。 - 屋敷内には、母屋の礎石や石柱、ヒンブン(目隠し塀)、便所を兼ねた豚の飼育小屋であるフル、シーリ(下水溜)や井戸といった石造の構造物が点在する。	
西原間切棚原 村 から 伊田 親雲上 宛の板 証書 (棚原 115) [町指定歴史 資料]	【分類】: 歴史資料 1869年に作成されたもので、作成者は不明。 - 端正な楷書を用いて、候文で470字の文字が刻印されている。 「道光年間(1821～1850年)に西原間切棚原村は自然災害によって疲弊し、140万貫にもおよぶ多額の負債をかかえた。それを聞きつけた伊田親雲上は、百姓たちが立直れるようにいろいろと援助し、そのおかげで農作業もうまくいき、年貢や諸上納も完納することができた。その御恩を、子々孫々にいたるまで忘れないためにこの感謝状(板証書)を贈呈した」という内容である。	
棚原ノロ殿内 (棚原 120)	【分類】: 祭祀信仰 - 拝殿の中には祭壇が設けられ、ミルク(弥勒)神が祀られている。 - このノロ殿内に祀られている神々は、ユーヌ神(世の神)であるので、旅立ちのときにはここを参拝する慣わしがあったとも伝わる。	

③今後の取組方針

ア. 観光活用に向けた既存散策コースの情報発信・新規コースの整備

- 観光ガイドマップに掲載されている棚原グスクを起点とした散策コースについて情報発信を促進するほか、周辺の休憩ポイントや店舗などを含めた散策マップを作成し、周知を図る。
- 石畳道や土帝君など散策の核となる文化遺産については、アクセス道の整備や解説板・誘導サインの整備を検討する。

イ. 域内文化遺産の調査研究の推進

- 棚原グスクや棚原貝塚など先史時代の遺跡について、整備や活用のあり方を検討するためにも、調査研究・記録を促進する。
- 「棚原のミルク」や「酉年まーるあしび」など特徴的な文化遺産について、映像による記録保存を行う。

- 那覇市首里地域との関連性について、土帝君を持ち帰ったとされる「首里のニシムイ」の調査や、「赤田のみろく」との比較を行うなど、調査研究を深めていく。

ウ. 石畳道など特徴的な文化遺産保全の推進

- 石畳道の周辺環境は、開発などにより風情が失われつつあることが懸念されており、地域住民との意見交換を行いながら、保全のあり方を検討する。
- 石造の構造物や、「棚原」という地名の由来ともなった棚田を育んだ地形景観など、棚原区の特徴的な文化遺産とその周辺環境の保全を推進する。

エ. 文化遺産の保存・活用に向けた体制の構築

- 地域で文化遺産を保存・活用する団体を支援する。また、自治会や地域団体を中心に、文化遺産の保存・活用を検討する組織の結成などを支援する。

オ. 他地域と連携した「ミルク」の情報発信の推進

- 「棚原のミルク」は、首里の赤田から伝えられたとされることから、首里や他地域のミルクや行事の内容を比較したビジュアルブックなどの作成をとおして、棚原区の歴史文化の特徴や魅力を発信していく。

凡 例

- 古文書
- 歴史資料
- 祭祀信仰
- 集落関連
- 交通・通信、治山・治水関連
- 官公庁・政治関連
- 生活関連
- 教育・文化・社会生活
- 墳墓並びに碑
- 名勝・天然記念物
- その他

〈芸能〉
ウファアチジナ
ミルクガナシーヌウマトリリタティ
八月遊び (村遊び)
ニーセージナ※消滅

〈口承文芸〉
竜宮に行った稲福婆

柵原

0 400 m

(3) 運玉森周辺保存活用区域

①ストーリー

西原町と与那原町の境界に位置する運玉森は、方言で「ウンタマモー」または「ウンタマムイ」、別名「西原富士」とも呼ばれ、西原町民の心の拠り所となっている山といえます。町のシンボルとして、町内の各小中学校の校歌や町歌などに取り入れられており、小学校の卒業記念として運玉森登山なども行われてきました。頂上付近からは、集落の町並みや知念半島、中城湾に浮かぶ島々が見渡せる風光明媚なところです。

運玉森には安室と与那原町字大見武の両方の御嶽があり、西方は安室で、南方は大見武の拝所となっています。かつては安室や桃原集落のカヤモー（生活燃料・材料の収集地）でもありました。また、安室のアシビのときには、男たちが運玉森にこもって練習したといいます。

●多くの伝説

18世紀の初頭に活躍したとされる義賊・運玉義留が隠れ住んでいたという伝承があり、芝居や映画の題材にもなってきました。西原町立図書館のマスコットキャラクターにも、「ウンタマガルー」の呼称が用いられています。

また、運玉森のふもとにある烏帽子井には「天女羽衣伝説」があり、与那原町との境となる中腹あたりには、首里の王女が祀られていると伝わる三津武嶽もあります。

運玉森の西側には、嘉手苅村出身で歌・三線と相撲好きな御茶多理真五郎にまつわる御茶多理道があるなど、歴史的人物にまつわる豊かな口承文芸の世界をかたちづいています。

●山の返し

運玉森のケーシ(返し)として仕立てられた石獅子が、呉屋と桃原の集落に伝わっています。

呉屋集落には、運玉森に向けて設置された石獅子があり、「ヤマヌカミ(山の神)のケーシ(返し)」であるといわれています。いわば集落の守護的な性格を持つものであり、これをしないと精気を取られるとされました。また、運玉森のふもとに位置する桃原集落にも、呉屋の石獅子に相対するように石獅子が設置されていました。これは呉屋の石獅子が運玉森の返しとして設置されたため、桃原で度々出火が起き、その火返しのために設置したといわれています。

●激戦地

現在はそのほとんどがゴルフ場となっていますが、沖縄戦では、日米両軍による激しい戦闘が展開され、ふもとの与那城、我謝、安室は焼け野原となりました。戦後、西原町内で最初に居住許可が降りたのは与那城と我謝の一部であり、戦後の西原町の歩みは、ここから始まったといえます。

このように、運玉森周辺は、沖縄戦における激戦地として戦争の記憶を伝える場所であると同時に、運玉義留などの民話をはじめ、西原町における豊かな口承文芸の世界を伝える場所でもあります。西原町の特徴として本構想においても特別な地域と考えられることから、保存活用区域として位置づけます。

②主な文化遺産

運玉森周辺保存活用区域の主な文化遺産は、下表のとおりである。

表 主な文化遺産

名称	概要	写真
運玉森 (桃原 23)	【分類】: 名勝・天然記念物 - 運玉森は標高158.1メートルで、地質的には島尻層群にシルト質泥岩層と砂岩層からなる。 - 西原富士と称される美しい山容を持ち、町民の心の拠り所となっている。	
みちんじやき 三津武嶽 (与那城 32)	【分類】: 祭祀信仰 - 運玉森東側中腹に立地する古墓。『球陽』外巻「遺老説伝」(1745年)には、日本に漂流した聞得大君が帰国し、与那原の御殿山(現在の与那原小学校東向い)に居を構えていたが、死後、三津武嶽に葬られたとある。 『琉球国由来記』(1713年)に記載されている「友盛ノ嶽御イベ」に相当する。	
みちんざちうが 三津武嶽拝み (与那城 31)	【分類】: 祭祀信仰 - 一年間に生まれた子どもの数を報告し、健康を祝す祭祀で、与那城の年中行事である。 - 与那城では、三津武嶽に葬られた聞得大君の説話を伝えながらも、聞得大君が死の直前に、私を葬って後、子どもが誕生したときには拝むようにとの遺言を残した。それから「ミチンザチウガミ」を行うようになったと伝わる。	
エボシガー (我謝 32)	【分類】: 集落関連 - 運玉森のふもと標高43m 前後に位置する。『琉球国由来記』にはエボシガワノ嶽(神名: 君ガ御水主ガ御水ノ御イベ)とある。 昔、古波津爾也という人が、その泉を自分の烏帽子を置いて、農耕したのにちなんで、エボシガワと称するようになったと伝わる。天女羽衣伝説がある。かつて、この井泉で聞得大君加那志らによって毎年2～3月に祭祀が行われた。	
オンタマノ嶽 (安室 53)	【分類】: 祭祀信仰 『琉球国由来記』にはオンタマノ嶽(神名: スズノ御イベ)とある。運玉森山頂より少し西側に位置するのが安室の拝所となっている。	—
うんたまぎるー 運玉義留	【分類】: 口承文芸 - 芝居に登場する義賊。油喰坊主とともに運玉森を拠点とし、王族や士族の家から盗み取った金品を貧民へ分け与えたとされる。 - 映画の題材にもなっている。	—

名称	概要	写真
とーふぐわーびら 豆腐 小坂	【分類】 :口承文芸 字池田から首里弁ヶ嶽へ上る旧道である。この道の土質が泥岩からなり、まるで豆腐の角切りに似ていることからこの名前となった。現在は沖縄自動車道の開通に伴い一部が分断され、通行不能となっている。	—
うちやたいみち 御茶多理道	【分類】 :集落関連 - 首里から弁ヶ嶽を経て、西原（池田・桃原・小波津・呉屋方面）へ至る道。運玉森の西側を通る。 - 西原町の海側の集落や中城村の伊集・津覇・和宇慶方面の人々が首里へ野菜や魚、塩などを売りに行くために使用した旧道である。この道には、『球陽 外巻 遺老説伝』にも登場する御茶多理真五郎の墓、御茶多理ヒージャーなどが所在する。 - この道を利用していた地域では、御茶多理真五郎の伝説から、ムーチーなどの節日を一日早く執り行う。	—
呉屋の石獅子 (呉屋 28)	【分類】 :集落関連 運玉森に向けて設置された石獅子があり、「ヤマヌカミ(山の神)のケーシ(返し)」であるといわれている。	
桃原の石獅子 (桃原 58)	【分類】 :集落関連 1996年に、桃原の古島付近で2基の石獅子が掘り出された。盗難をおそれて埋めたものだと伝わる。 - 呉屋の石獅子が運玉森への返しとして設置されたため、桃原で度々出火が起き、その火返しのため仕立てたといわれている。	

※名称後ろの数字は、文化遺産 ID である。

③今後の取組方針

ア. 運玉森周辺の景観保全の推進

- 景観整備の所管課と連携しながら、運玉森から海岸線への眺望や、平野部から運玉森への眺望の保全を図る。

イ. 「戦争の記憶」の継承の推進

- 運玉森は「コニカルヒルの戦い」が行われた激戦地でもある。写真展などによる情報発信を行い、自然や眺望だけではなく、戦争の記憶についても次世代へ継承する。

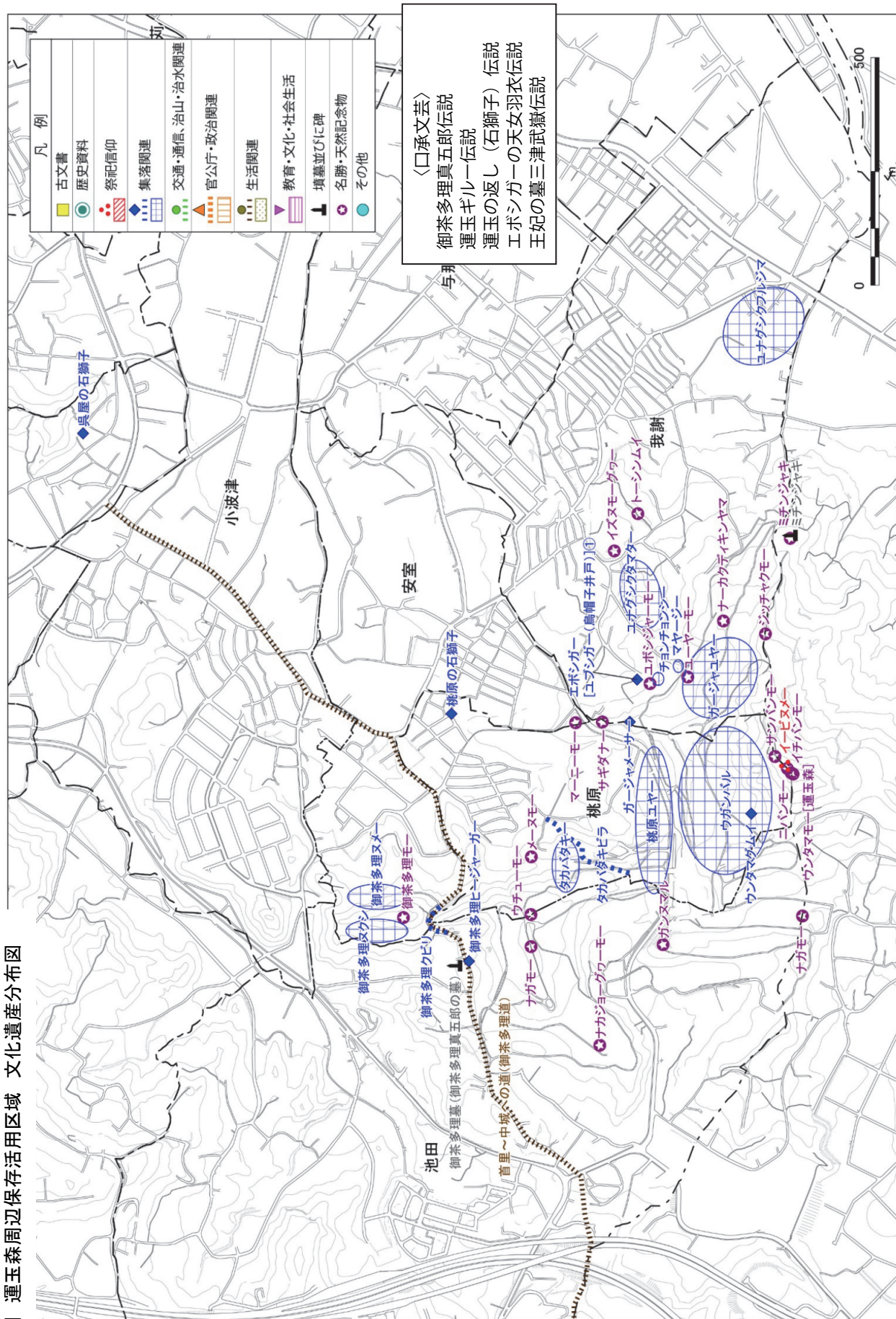
ウ. 与那原町との連携強化

- 運玉森は与那原町との境目に位置するが、山自体は大半が与那原町の町域に含まれており、その保全や活用にあたっては、与那原町との連携した取組を行う。

エ. 義賊・運玉義留ストーリーなど情報発信の推進

- 運玉森にまつわる口承文芸のひとつである義賊・運玉義留を題材とした映画鑑賞会を開催するなど、町内外に向けた情報発信を行い、運玉森に関する歴史文化を PR する。
- 町内のボランティア団体や子育て支援組織、PTA などと連携して、子ども向けの絵本・紙芝居の作成、読み聞かせ会などを実施し、郷土に伝わる民話や伝承に親しむ環境づくりを促進する。

圖 運玉森周邊保存活用區域文化遺產分布圖



4. 西原町の関連文化遺産群の位置づけ

(1) 金丸（尚円王）ゆかりの地関連文化遺産群＋保存活用区域

①ストーリー

第二尚氏王統の始祖である金丸（尚円王）が内間の領主になってから王位につくまでの間、西原の地で生活していたことから、町内には金丸に関する文化遺産が多く残されています。

金丸の没後およそ 190 年経った 1666 年頃、金丸の旧宅跡が、摂政・向象賢（羽地朝秀）の進言によって内間御殿として整備され、その後も改修が重ねられてきました。また、近隣住民は、1706 年に東江御殿の北側に新たな神殿を普請しています。このことから、内間御殿は、国家的聖地だけでなく、地域の英雄である金丸に対する崇敬の念を抱き続けてきた村落共同体の聖地としても認識されるようになりました。さらに、太平洋戦争・沖縄戦で内間御殿が消失した際には地域住民による復興が進められるなど、地域にとっても重要な文化遺産となっています。

東江御殿の石垣は珊瑚石灰岩でできており、この石垣は 1735 年に造られたと建造年代がはっきりしており、沖縄の石造技術を考える上で非常に重要な資料といえます。

また、金丸の家臣であった五郎という人物に関して、いい伝えが残されています。五郎は死後、御茶多理山に葬られたが、成仏せずに夜な夜な亡霊となって現れるようになり、御茶多理真五郎と呼ばれるようになりました。

このように、西原町の代表的な文化遺産である国指定史跡「内間御殿」を核として、内間・嘉手苺集落のみならず、町内全域の金丸に縁のある文化遺産を、金丸の暮らしの足跡をたどる関連文化遺産群として捉えます。

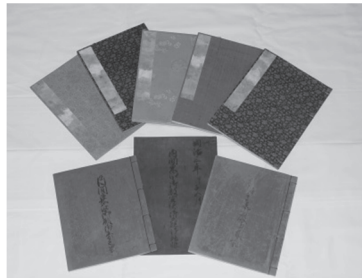
②主な文化遺産

金丸ゆかりの地関連文化遺産群に関する主な文化遺産は、下表のとおりである。

表 主な文化遺産

名称	概要	写真
内間御殿 (嘉手苺23、24) [国指定史跡]	【分類】: 祭祀信仰 - 第二尚氏王統の始祖金丸が内間地頭に任ぜられたときの旧宅跡地に、尚円王没190年を経て建てられた神殿とその空間である。 - 時代が経つにつれて、東江御殿・西江御殿の整備・改修や先王旧宅碑の設置など金丸の旧宅が国家的聖地の神殿として整備されていった。	
東江御殿 (嘉手苺20) [国指定史跡 範囲内]	【分類】: 祭祀信仰 1660年代に向象賢(羽地朝秀)によって聖地として整備された神殿。 - 東江御殿では大根やニンニク、さつまいもがつくれ、首里城に献上したと伝えられている。	

名称	概要	写真
先王旧宅碑 (嘉手苅44) [国指定史跡 範囲内]	【分類】:古文書 - 内間御殿を改修したときの竣工記念碑である。戦前までは東江御殿の敷地内に建てられた瓦葺きの覆堂内に厳重に保管されていた。 - 沖縄戦で破損したため、現在は石碑の一部と台座だけが残っている。	
「致和」の扁額 (嘉手苅47) [国指定史跡 範囲内]	【分類】:古文書 - 戦前まで東江御殿の本門に「致和」の木製扁額が掲げられていたが、現在は県立博物館・美術館に保管されている。 - 東江御殿神殿内には扁額と同規格の石碑が安置されている。	
西江御殿 (嘉手苅22) [国指定史跡 範囲内]	【分類】:祭祀信仰 - 西原間切の人民によって1706年に普請され、聖地として王府より追認された神殿である。 - 西江御殿の敷地内にはイリーヌ御ビジルやイリーヌウブガーがある。	
イリーヌウブガー (嘉手苅10) [国指定史跡 範囲内]	【分類】:集落関連 - 西江御殿の後方に位置する円形の掘り抜き井戸である。 - ウブガーとして利用されていた井戸で、現在も水量は豊富である。井戸の壁は、野面積みで積まれている。	
イリーヌ御ビジル (嘉手苅31) [国指定史跡 範囲内]	【分類】:祭祀信仰 - 西江御殿敷地内に祀られている。御ビジル内には、神石とみられるものは見当たらず、本来所在していたと推される場所は空間になっている。 - 子授けや健康祈願が行われる。	
東江家 (嘉手苅25) [国指定史跡 範囲内]	【分類】:集落関連 - 嘉手苅集落の草分けの家といわれる。 - 敷地内には複数の拝所がある。 - 東江家を含む一帯は、かつて第二尚氏王統の始祖金丸にゆかりがある土地である。	
アガリーヌカ ー (嘉手苅11) [国指定史跡 範囲内]	【分類】:集落関連 - 東江家敷地内にある掘り抜き井戸で、集落内で最も古いといわれる。 - ウブガーとしても利用された。	

名称	概要	写真
東江家敷地内の拝所 (嘉手苅30、35) [国指定史跡範囲内]	【分類】: 祭祀信仰 - 東江家の敷地内に所在する2連の祠には、火の神とアガリーヌ御ビジルが祀られている。 - また、同敷地内にはコンクリート製の東江家の祖神を祀る神棚がある。	
カニマルウカー (嘉手苅8) [国指定史跡範囲内]	【分類】: 集落関連 - 内間御殿横にある井戸で金丸が使っていたと由来が残されている。 - 現在も水を蓄えており、ハチウビー・ウマチーの際には御願が行われている。	
イーソウスマシウカー (嘉手苅9) [国指定史跡範囲内]	【分類】: 集落関連 - 西江御殿の前にあり、ノロが衣装を洗ったという話が伝えられている。 - 若水を汲んだ井戸で、ハチウビー・ウマチーに御願が行われる。	
内間御殿のサワフジ (嘉手苅3) [町指定天然記念物]	【分類】: 名称・天然記念物 - 内間御殿内に植えられているサワフジの木で、樹齢約400年以上といわれており、本島内でも古い老木のひとつである。 - 地元では花の形状が鳩目銭をぶら下げているのに似ていることから、ジンカキーギー（銭掛け木）などと呼んでいる。 2003年12月26日、沖縄県の「おきなわの名木」に内間御殿石垣内のフクギと共に認定された。また、2012年5月8日には西原町指定の天然記念物となった。	
『西原中山家文書』 (嘉手苅46) [町指定古文書]	【分類】: 古文書 - 代々東江御殿の御殿守をつとめ、かつ御殿の祭祀を司ってきた中山家に所蔵されている18世紀～19世紀にかけて記録された古文書で、公文書と中山家の私文書の2種類あり、それぞれ4冊ずつの計8冊となっている。公文書には内間御殿の創建、由来、年中祭祀などについて記録され、私文書には内間ノロの代合（継承）や御殿に関わる祭祀の仕様などについて記録されている。 - 宗家を中心とした当時のムラ単位の祭祀の仕様や実態を知るうえで極めて重要な資料である。1987年8月7日に町指定の有形文化財古文書となった。	
儀間ヌウカー (嘉手苅13)	【分類】: 集落関連 内間御殿に関連する祭祀場のひとつである。かつて金丸が魚網を干したという伝承から、“アミウーシガー”とも呼ばれている。	

名称	概要	写真
カヤブチ御殿 (内間 25)	【分類】: 祭祀信仰 - カヤブチ御殿がある一帯は内間集落発祥の地で、多くの聖地や拝井泉、旧家が集中している。 - 金丸が首里へのぼる途中、一時ここに逗留し、内間ノロと一緒に過ごしたという話が伝わっている。	
イワオーウカー (内間 16)	【分類】: 集落関連 カヤブチ御殿に隣接する井戸。金丸が使っていたとされ、この水は縁結びで、ウビー式(結婚式)はこの水で行うという。	
ナコーモー (内間 41)	【分類】: 名勝・天然記念物 - 金丸と内間ノロの出会いの場であったといういい伝えが残っている。 - 旧暦6月ウマチーには、字内間の新川門中の人たちによって、ムディ餅と煙草が供えられている。	
大美御嶽	【分類】: 祭祀信仰 - 嘉手苅集落の北にある小高い丘にある。集落発祥の地といわれ、かつては西江御殿へとなだらかに続く丘陵でつながっていた。 - ノロが就任する際に拝んだ井戸がある。	
ンスハジー (小那覇 48)	【分類】: 祭祀信仰 - かつて内間高干瀬と呼ばれる一帯にあったが、南西石油精製工場建設の際にほとんどが埋め立てられている。 - ンスハジーは金丸が王(龍)衣に着替えた場所とされている。	
うちやたい 御茶多理 まぐらー 真五郎の墓 (池田 21)	【分類】: 墳墓並びに碑 尚円王の臣下であった五郎の墓である。五郎は死後、御茶多理山に葬られたが、成仏せずに夜な夜な亡霊となって現れるようになり、御茶多理真五郎と呼ばれるようになった。	
尚円王妃の墓 (安室 46)	【分類】: 墳墓並びに碑 「尚円王妃の墓」と呼ばれる文化遺産であるが、詳細不明。	
ウガンジャマー (津花波 3)	【分類】: 祭祀信仰 - 県道38号線あたりの津花波と呉屋の境界付近にあった拝所である。ムチグワークーやシングワークーヨーのときに拝んでいた。 - 金丸が首里にのぼる際、かつての妻が復縁を求めた場所と伝わる。	

※名称後ろの数字は、文化遺産 ID である。

③今後の取組方針

ア. 金丸（尚円王）に関する情報発信の推進

- 金丸の人となりを描いた絵本・副読本や、西原町内に所在する金丸ゆかりの地を巡る観光マップなどを作成し、金丸や金丸に関する文化遺産を町内外に発信する。作成した副読本などは、学校教育で活用するほか、西原町役場や町内の文化施設・観光施設で配布するなど、多くの町民および来訪者の目に触れるようつとめる。

イ. 内間御殿など関係する文化遺産の復元整備の推進

- 国指定重要文化財「内間御殿」の復元整備及び周辺に点在する関連文化遺産について、地域住民や有識者と十分に意見交換を行いながら進めていく。復元整備が難しい文化遺産については、解説板や標柱などを整備し、周知を図ることで対応する。

ウ. 管理・活用団体の支援・設置

- 内間御殿の管理および活用にあたっては、重点区域となる嘉手苅・内間の住民が積極的に関わることができる仕組みを構築し、愛着醸成と地域内での管理意識の向上を図る。
- 内間御殿や金丸に関する文化遺産において、清掃などの日常的な管理活動や、散策ガイドなどの活用を行う団体を支援する。
- 金丸に関する文化遺産が町内に点在するという関連文化遺産群の特徴をいかすため、地域の枠を越えて町全体で金丸に関する文化遺産を保存・活用する体制を構築する。

エ. 関係市町村との交流の促進

- 金丸の出身地である伊是名村や、身を寄せた国頭村、即位後に尚円王として過ごした那覇市首里など、今後も金丸を軸とした交流を図り、連携して関係イベントを開催するなど、金丸ストーリーの発信・普及活動につとめる。

オ. 金丸（尚円王）をいかしたまちづくり・ひとづくりの推進

- 金丸をモチーフとした関連商品を開発するなど観光や産業など他分野への活用や、まちづくり、ひとづくりにいかす。

図 金丸(尚円王)ゆかりの地関連文化遺産群＋保存活用区域 文化遺産分布図

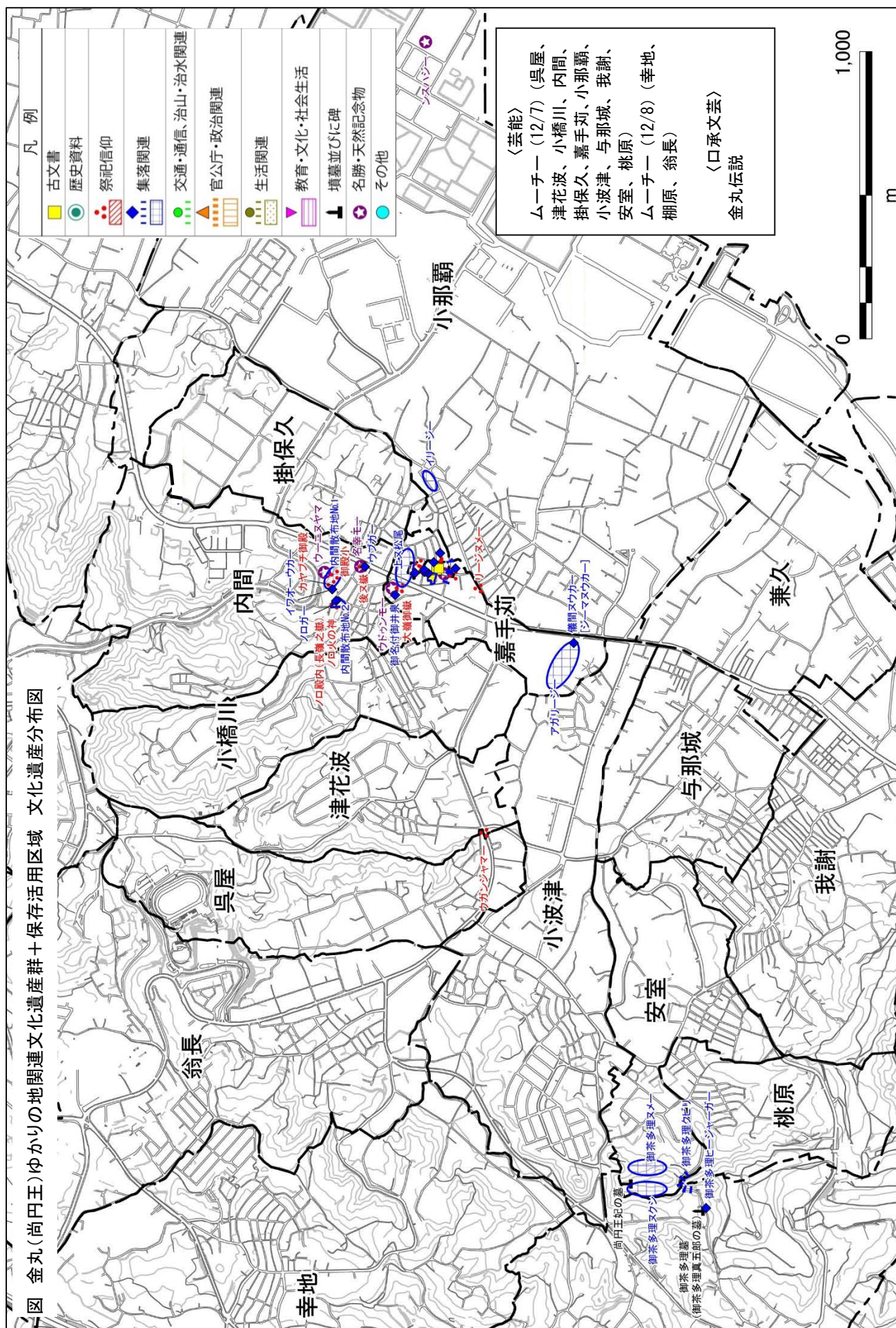
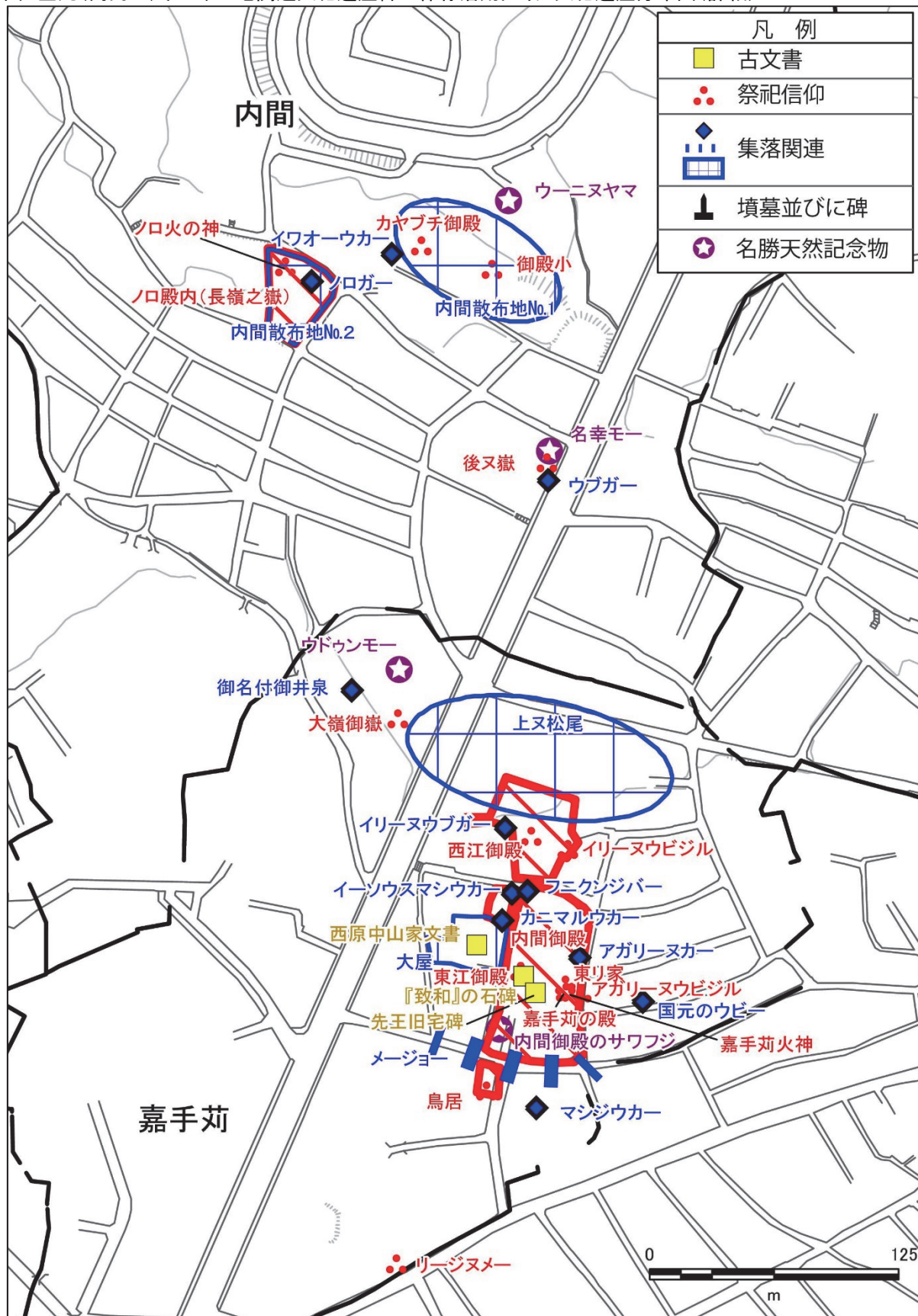


図 金丸(尚円王)ゆかりの地関連文化遺産群+保存活用区域 文化遺産分布図(詳細)



(2) 戦争の記憶関連文化遺産群

①ストーリー

西原町は、沖縄戦において住民の約半数が命を失った激戦地でありました。現在でも旧西原村役場壕をはじめ、壕や弾痕の残る壁などが残されており、町はこれらの戦争遺跡を保存継承し、戦争の悲惨さと「平和の心」を伝えています。

沖縄戦では、旧日本軍が首里に司令部を置いたため、宜野湾市や浦添市、そして西原町は、首里を守るための防護線として位置づけられました。西原町（当時は西原村）には旧日本軍が配備され、民家に宿泊し、各地で陣地壕や病院壕を掘っていました。これらの壕や小那覇飛行場の建設には住民が動員されました。また、1945年に設置された野戦病院では、西原村の女性が補助看護婦として動員されています。

1944年の10・10空襲では、飛行場や小那覇集落、製糖工場が空襲を受けました。1945年4月から始まった地上戦では、棚原・上原（スカイライン）丘陵や運玉森周辺での戦闘が激しくなり、多くの犠牲者を出しています。仲伊保・伊保之浜・嘉手苅・小那覇など東海岸の住民は北部へ疎開した者が多く戦没者は比較的少ないのですが、南部方面へ避難した翁長・幸地・我謝・桃原など丘陵部や運玉森近辺の住民には戦没者が多かったといえます。

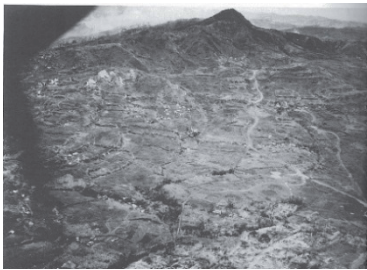
西原町は沖縄戦における激戦地として、戦争の記憶と平和の大切さを伝える地域として1985年に「非核反戦平和都市宣言」を宣言しています。町内に所在する戦跡やいい伝えなど、戦争の記憶を受け継ぐための文化遺産を、ひとまとまりの関連文化遺産群と捉えます。

②主な文化遺産

戦争の記憶関連文化遺産群に関する主な文化遺産は、下表のとおりである。

表 主な文化遺産

名称	概要	写真
西原の塔 (翁長 104)	【分類】: 官公庁・政治関連 - 日露戦争、第一次世界大戦、日中戦争などで亡くなった戦没者を祀るため、1941年頃に「忠魂碑」として建立されたが、沖縄戦により破壊された。その後、生き残った西原村民が協力し、兵士や住民の遺骨を収集して現在の西原の塔に納骨した。 1955年「西原村慰霊塔」として全面改修、1968年に「西原の塔」として改修された。 - 毎年10月に、戦没者追悼式が行われている。	
翁長の旧村役場壕 (翁長 72) [町指定史跡]	【分類】: 官公庁・政治関連 1944年に、重要書類の保管や、戦闘中でも会議を実施するためにつくられた壕である。 - 戦後、民間業者の土取りによって一部が破壊され、道路に面している部分は大きく開けている。 2015年6月9日に町指定史跡に指定。	

名称	概要	写真
棚原の野戦病院壕 (翁長 73) ※別名：西原町第62師団第1野戦病院棚原分室壕	【分類】：官公庁・政治関連 1945年2月21日、西原村に配備された第62師団独立歩兵第11大隊のため、棚原と池田に野戦病院が開設され、村の女性が補助看護婦として召集。5月には戦況の悪化により解散した。 - 戦後、野戦病院壕や周辺の畑からは、大量の薬品瓶や医薬品、遺骨が収集されている。	
小波津の陣地壕 (小波津 67)	【分類】：官公庁・政治関連 - 西原村に駐屯していた部隊の野戦砲陣地として、津記武多グスクの下につくられた壕。1944年の10・10空襲後に村民を徴収して掘られた。 - 既存の民間の墓室と前庭部をそのまま利用してつくられたため、外観は周辺に群集する墓のひとつに見えていたという。壕の構造はU字型になっており、入り口が2か所あったが、現在は落盤により1か所しか開いていない。	
小波津の弾痕の残る壁 (小波津 66)	【分類】：官公庁・政治関連 - 沖縄戦が始まると、小波津家は旧日本軍の宿舎として利用されたため、中城湾の米軍艦隊による激しい砲撃を受けた。 - 戦後、屋敷は跡形もなく、石垣だけが残った。石垣には生々しい砲弾の跡が残っており、沖縄戦の激しさを物語る負の遺産である。	
運玉森 (桃原 23)	【分類】：名勝・天然記念物 - 沖縄戦当時、米軍は運玉森を「コニカルヒル」と呼び、1945年5月13日から21日までの間、激しい戦闘「コニカルヒルの戦い」が展開された。 - 当時、運玉森には旧日本軍1,000人が配置されていたが、猛烈な艦砲射撃で制圧された。戦後、不発弾の自然発火により、いくどとなく山火事が起きている。	
その他	- 旧日本軍の陣地壕・観測壕をはじめ、避難壕など、大小あわせて約40の壕が現存する。 - 日本兵の兵舎(国民学校など)や関連施設も多数所在していた。 - 西原の塔以外にも、小波津や小橋川に字の慰霊碑が建立されている。	—

※名称後ろの数字は、文化遺産IDである。

③今後の取組方針

ア. 文化遺産活用に向けた調査・整備・公開の推進

- 町内に所在する大小およそ40の壕をはじめとした関連文化遺産について、記録調査を行いながら、整備や検討を進める。特に翁長の旧村役場壕や棚原の野戦病院壕、小波津の陣地壕

など特徴的な文化遺産は、激戦の地・西原町の特徴をより分かりやすく伝えることができるよう、情報発信していく。

イ. 町内児童・生徒・学生向け平和学習への積極的活用の推進

- 町内の小学校・中学校・高校などで実施される平和学習のフィールドとして活用する。
- 積極的活用につなげるため、学校教育所管課との連携強化や、授業で活用できるような沖縄戦や沖縄戦にまつわる文化遺産を解説した副読本の作成、安全に見学するための指導マニュアルなどの作成を進めていく。

ウ. 町外の平和学習ツアーなどへの活用の推進

- 町内と同じく、町外から訪れる「平和」をテーマにした修学旅行や観光客に向けても、情報発信の強化やガイドの育成、旅行社などとの連携強化を図る。

エ. 宜野湾市・浦添市と連携した沖縄戦の歴史継承の推進

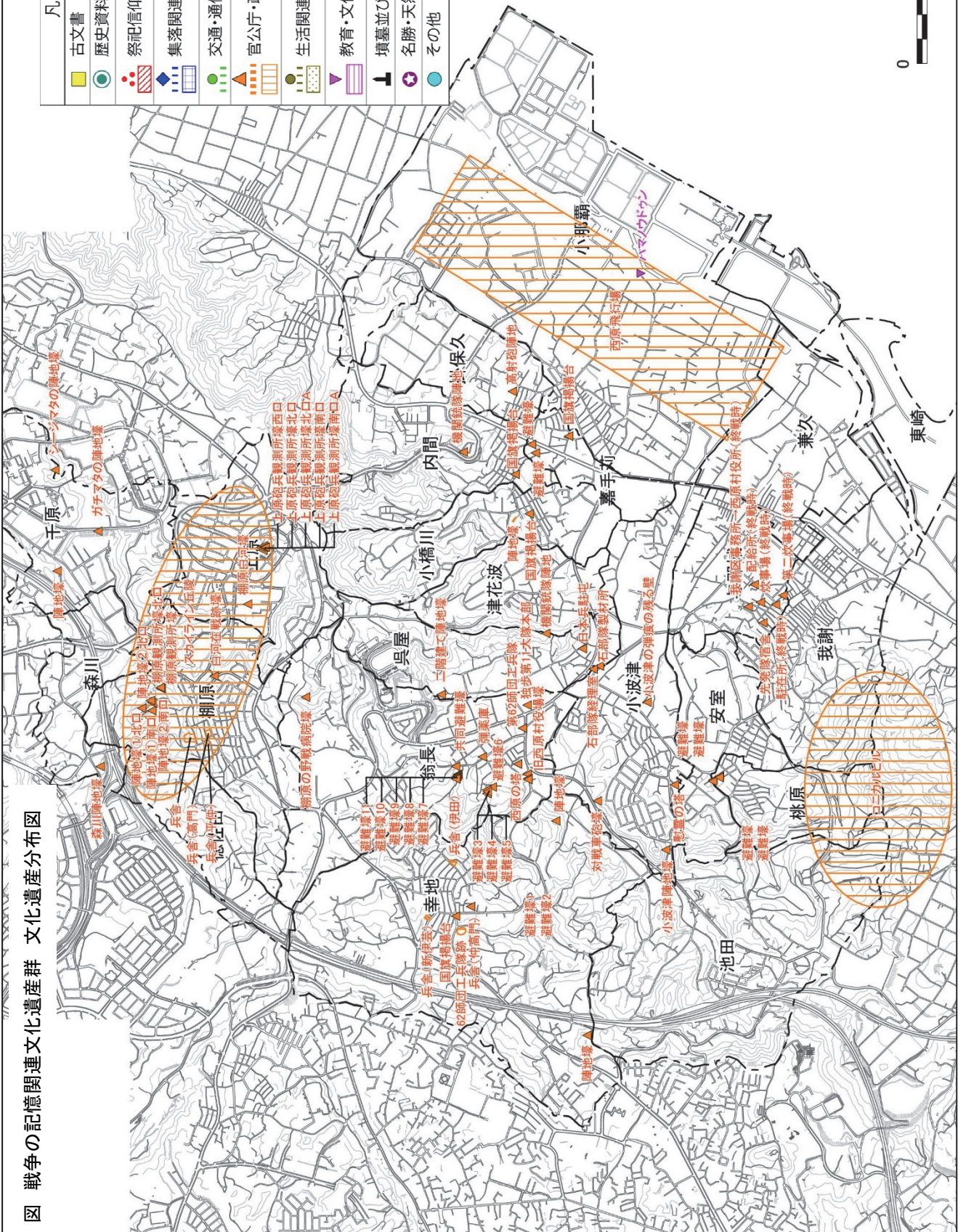
- 西原町と同じく首里を守る防護線と位置づけられた宜野湾市や浦添市など近隣の市町村と連携し、市町村の枠を超えた平和学習ルートの確立・発信や、共同したシンポジウムの開催、沖縄戦に関する記録の作成を行うなど、連携した取組を促進する。

オ. 解説本・ガイドマップなどの作成・情報発信の推進

- 『西原町史 第3巻 西原の戦時記録』などをベースに、西原町が激戦地となった理由や、西原町での戦闘の様子・被害状況などについて分かりやすく解説したガイドブック、平和音楽祭で行われる平和宣言の内容を盛り込んだ平和学習教材、戦争の記憶関連文化遺産群のガイドマップを作成するなど、戦争の記憶を分かりやすく発信するための情報整理を行う。

図 戦争の記憶関連文化遺産分布図

凡 例	
	古文書
	歴史資料
	祭祀信仰
	集落関連
	交通・通信、治山・治水関連
	官公庁・政治関連
	生活関連
	教育・文化・社会生活
	墳墓並びに碑
	名勝・天然記念物
	その他



(3) 稲作とまつり関連文化遺産群

①ストーリー

かつて西原町は、「稲作の村」と呼ぶにふさわしい中頭・島尻地方トップクラスの水田地帯でした。王府直轄地であったときには王府の穀倉地帯として重要な役割を担っており、また首里城での稲穂祭に、西原間切から初穂を献上していました。稲作行事の綱引きも盛んに行われ、明治 38 年には、我謝馬場において日露戦争旅順陥落祝捷会が挙行され、同時に間切綱も行われています。その後も大正 4 年、昭和 12 年にも村を二分して西原村大綱引きが行われています。

戦後になって稲作はサトウキビ作に転換されたことから、現在、町内で稲作は行われていませんが、現在でも綱引きや豊年祭など稲作・農業に関連する行事が継承されています。これらの五穀豊穡・子孫繁栄を祈願する祭祀行事は、地域の歴史や生業の姿を現在に伝える重要な文化遺産です。

●綱引き

現在、町内でウファチジナを催しているのは、幸地、棚原、呉屋、津花波、小橋川、内間、嘉手苅、小那覇、我謝、小波津の 10 字です。そのほか、ニーセージナやウマチージナなどが行われる地域もあります。

●獅子舞

獅子舞は五穀豊穡と集落の繁栄を祈願する行事です。

西原町では幸地、翁長、小橋川、内間、小那覇、我謝、桃原、小波津の 8 つの地域で継承されています。

●村遊び

五穀豊穡を感謝し、豊年を祈願する村遊びでは、多様な芸能が奉納演舞されます。

なかには、その地域でしか行われていない踊りが伝わる地域も存在します。現在は、幸地、棚原、翁長、小那覇、我謝、桃原、小波津で行われており、棚原では、12 年に一度ミルク神の生まれ年に行われるため、マールアシビ(廻る遊び)と呼ばれています。

幸地の村遊びでは、旧暦 8 月 13 日にシーシヌウンケー(獅子お迎え)と称して、ムートウヤー(宗家)を拝んで廻ります。15 日が獅子舞の本番で、16 日はシーシヌウークイ(獅子お送り)の祭祀が行われます。

このような穀倉地帯であった西原町の特徴を踏まえ、町内全域で行われている獅子舞や八月遊び、小波津の棒、棚原のミルクといった現在も伝承されている芸能や民俗行事を、ひとつの関連文化遺産群として捉えます。

②主な文化遺産

稲作とまつり関連文化遺産群に関する主な文化遺産は、下表のとおりである。

表 主な文化遺産

名称	概要	写真
棚原のミルク (棚原 133)	【分類】: 芸能 - 首里の赤田から伝わったとされ、ミルクの仮面などは棚原ノロ殿内の祭壇に祀られている。 - 酉年の旧暦8月15日には、ミルクの仮面を頭から被り、神衣装を着け、世果報を祈願するミルク踊りを行う。 - 旧暦12月20日には“ウマリティタティ”と称して、 - この年に生まれた赤子らの誕生をミルク神に報告し、健康を祈願する。	
翁長のヨンシー (翁長 116)	【分類】: 芸能 - 旧暦8月7日～15日、翁長集落のナカミチで行われる。 - ヨンシーは藁でつくられ、長さが約6m、頭部は大きく、尾部は細めに蛇型につくる。 - 現在は祭りが省略され、7日と15日のみ。	
綱引き	【分類】: 芸能 - 五穀豊穡や害虫駆除、ヒーゲーシ(火返し)などを祈願する神事で、集落最大の年中行事。 - 綱引きは、旧暦6月15日に行われるウマチージナ、23日から24日に実施されるニーセージナ、25日のウファチジナの3つに分類できる。 - 現在は10字で行われている	
ニーセージナ	【分類】: 芸能 - 旧暦6月23日から24日に実施される。 - 現在、幸地のみで実施されている。	
ウマチージナ	【分類】: 芸能 6月ウマチーの祭祀が終わった夜に、子どもらによって催される綱引きである。 - 棚原では15歳以下の子どもたちによる綱引きであることから、ワラビジナ(童綱)またはウスリージナとも呼んでいる。 - 小那覇では年2回行われる綱引きのうち、ウマチージナが行われる日をウグワンジナ(御願綱)とも称している。 - 現在、棚原、我謝、小波津などで行われている。	

名称	概要	写真
村遊び	【分類】: 芸能 - 村の神々に五穀豊穡を感謝し、豊年を祈願するためにアシビナー（遊び庭）で演じられる奉納舞踊である。 - 稲の収穫を終えたあとの、旧暦8月15日前後に催すところが多い。 - 字小波津では、小波津の棒が伝承されている。旧暦8月15日の夜に、字内の御嶽や拝所の前庭で、青年らが棒術を披露して豊作を祈願する。 - 棚原で「メーカタ（舞方）」の歌と空手舞が伝承されている。この芸能が棚原だけに伝承されていることについては、棚原は古くは浦添間切に属していたことに由来するとされている。 - 幸地には首里・赤田より習ったという独特な踊り「踊り天川」が伝わっている。西原は首里の直轄地であったため、首里の影響を受けていたと推定される歌や踊りも残されている。	
獅子舞	【分類】: 芸能 - 旧暦7月から8月にかけての豊年祭や旧盆に行われ、悪霊を払い、世果報を招来し、五穀豊穡と集落の繁栄を祈願する。 - 幸地、翁長、小橋川、内間、小那覇、我謝、桃原、小波津などで獅子舞が伝承されている。	

※名称後ろの数字は、文化遺産IDである。

③今後の取組方針

ア. 関連文化遺産の整備・修復・記録保存の推進

- 稲作に関するまつりに付随する拝所などの文化遺産（ハード）については、必要に応じて修復や整備を行い、まつりの継承を支援する。
- 各字が伝統芸能で使用する道具類（獅子舞、旗頭、ミルクの面・胴、衣装など）の修復または新調する際には、形状や製作技術などを記録保存することにつとめる。

イ. 芸能保存会などを中心とした継承・活性化の支援

- 町内のまつりや芸能に関して、若者の参加率が低く、次世代への継承が課題となっている地域も存在する。若者を取り込むための方策について、各地域の取組を支援する。
- 町のバックアップのもと、各地域の芸能を披露する舞台発表の場などを設け、町民の芸能鑑賞の機会と地域の伝統文化の周知を図る。
- 地域単位で自治会や委員会などが中心となった芸能保存会のような組織を結成したり、伝統芸能を保有する町内の字同士が情報交換・交流できるような協議会を設置したり、地域で伝統芸能を継承していくための取組を支援する。
- 学校教育においても、総合学習の授業やクラブ活動において、地域の保存会などの指導のもと

と、子どもたちが伝統芸能を体験する機会の創出を図る。

ウ. 伝統芸能アーカイブの作成

- 現在、町内で行われている年中行事や伝統芸能について、映像による記録保存を行い、アーカイブを作成する。特に 12 年に一度行われる「まーるあしび」などの行事は、優先的に記録保存を行う。
- アーカイブの作成にあたっては、大学やガイドの会、ボランティア組織などと連携した、まつりや伝統芸能の詳細調査の実施を検討する。
- アーカイブは一般への公開を検討するほか、記録にもとづいてビジュアルブックを作成するなど、西原町のまつり・芸能の魅力を発信する素材や場としても活用する。

エ. 年間を通じた祭祀や行事の魅力発信の推進

- 年間行事や祭祀のスケジュール・内容などの情報を、町内広報や観光に資するアプリケーション、公式ホームページなどで発信し、多くの人に魅力を伝えるとともに、町外からの観光客が西原町のまつりや伝統芸能に触れる機会を創出する。

[illegible]

青字＝消滅した祭祀名
緑字＝現存する祭祀名



（４）製糖と軌道関連文化遺産群

①ストーリー

西原町では従来、稲作が盛んでしたが、1900年代になって政府主導によりサトウキビ作へと転換が図られました。町内には糖業改良事務局が設置され、我謝に県内初の分蜜糖工場が建設されました。分蜜糖工場は分蜜糖を製造するだけでなく、農民から原料であるサトウキビを買い上げる方法を実施した県内初の工場でもあります。糖業の発展に伴い、1914年には、軌道上を馬車で貨物を輸送することを目的とした沖縄馬車軌道株式会社が設立されました。馬車軌道が整備されたことにより、製糖工場への原料搬入が便利になったことで搬入区域が拡大されるなど、地域産業の振興に貢献しました。そのような中、西原町出身の大城助素は、従来の圧搾機よりも効率のよい新しいサトウキビ圧搾機（大城式圧搾機）を開発し、沖縄の黒糖製糖の改善に多大な功績を残しました。

サトウキビ作への転換後、各字にサターヤー（製糖場）がありましたが、現在ではほとんどのサターヤーが消失しています。現在、幸地児童公園内や上原自治会事務所には、集落内で使用されてきたサターグルマが展示されています。

戦後も西原の地はサトウキビ作が盛んとなり、ふたつの製糖工場が稼働していましたが、原料の減少に伴い1999年にすべての工場が閉鎖されました。

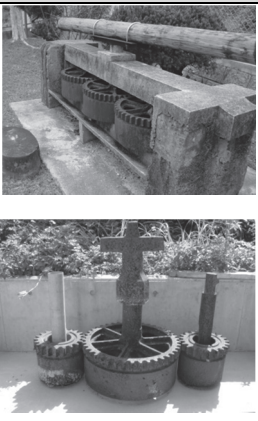
嘉手苅の製糖工場跡地は、現在、大型商業施設となっていますが、「製糖記念小公園」という製糖に関するモニュメントを設置したポケットパークが併設整備されています。戦前から戦後にかけて製糖業サトウキビ作が展開されたことも特徴といえることから、関係する文化遺産をひとつの関連文化遺産群として捉えます。

②主な文化遺産

製糖と鉄軌道関連文化遺産群に関する主な文化遺産は、下表のとおりである。

表 主な文化遺産

名称	概要	写真
故 おおしろすけそ 大城助素 之碑 (小橋川 34)	【分類】: 墳墓並びに碑 ・大城式甘蔗圧搾機玉車を発明し、沖縄県の基幹産業である糖業に大きく貢献した大城助素の偉業をたたえて、1921年7月に建立された石碑である。	

名称	概要	写真
サーターヤー	【分類】: 集落関連 - 各字に設置された製糖場である。農家自らがサトウキビをサーターヤーで製糖していたが、現在はほとんど残っていない。 - 幸地児童公園内にはサーターヤーで使用されていたサーターグルマが展示されている。 - 上原自治会事務所敷地内には、大城式压榨機玉車が現存している。	
沖縄製糖株式会社西原工場 (兼久 26)	【分類】: 生活関連 1907年に沖縄県で初めての近代的製糖工場が設置された。	—
軌道馬車の停車場 (小那覇 40)	【分類】: 交通・通信、治山・治水関連 戦前は交通の要衝地として、唯一軌道馬車の停車場があり、西原で一番賑わっていた。	—
軌道 (我謝 63)	【分類】: 交通・通信、治山・治水関連 旧県道にほぼ沿っている。	—
トーマチク (我謝 73)	【分類】: 官公庁・政治関連 - 県庁内に沖縄県臨時糖業改良事務局が設置され、糖業改良事務局はトーマチク(糖務局)と呼ばれた。 1908年には同局の附属製糖工場も竣工し、翌年から沖縄で最初の分蜜糖製造を始めた。	—
試験場跡地バス停	【分類】: 交通・通信、治山・治水関連 沖縄県立糖業試験場が西原町に所在していた名残として、国道沿いのバス停には、「試験場跡地」という名称を残すものが現存する。	
製糖記念小公園	【分類】: 教育・文化・社会生活 戦後の中部製糖工場跡地には現在大型ショッピングセンターが建設されているが、その一角にポケットパークを整備し、製糖業の歴史を後世に残すように西原出身者である大城助素が発明した大城式甘蔗压榨機玉車のレプリカや、モニュメントなどが設置されている。	

※名称後ろの数字は、文化遺産IDである。

③今後の取組方針

ア. 大城助素を活用した糖業に関する歴史継承の推進

- 西原町の糖業の歴史について、より周知を促進するために、糖業の発展に貢献した大城助素の伝記作成や、第二の大城助素を発掘する発明コンクール（例）などを開催し、地域の偉人の一人である大城助素に関する情報発信を推進する。
- 産業まつりで行われている製^{しゅーじょーすーぶ}造勝負などを継続していくことで、製糖技術の継承を図る。

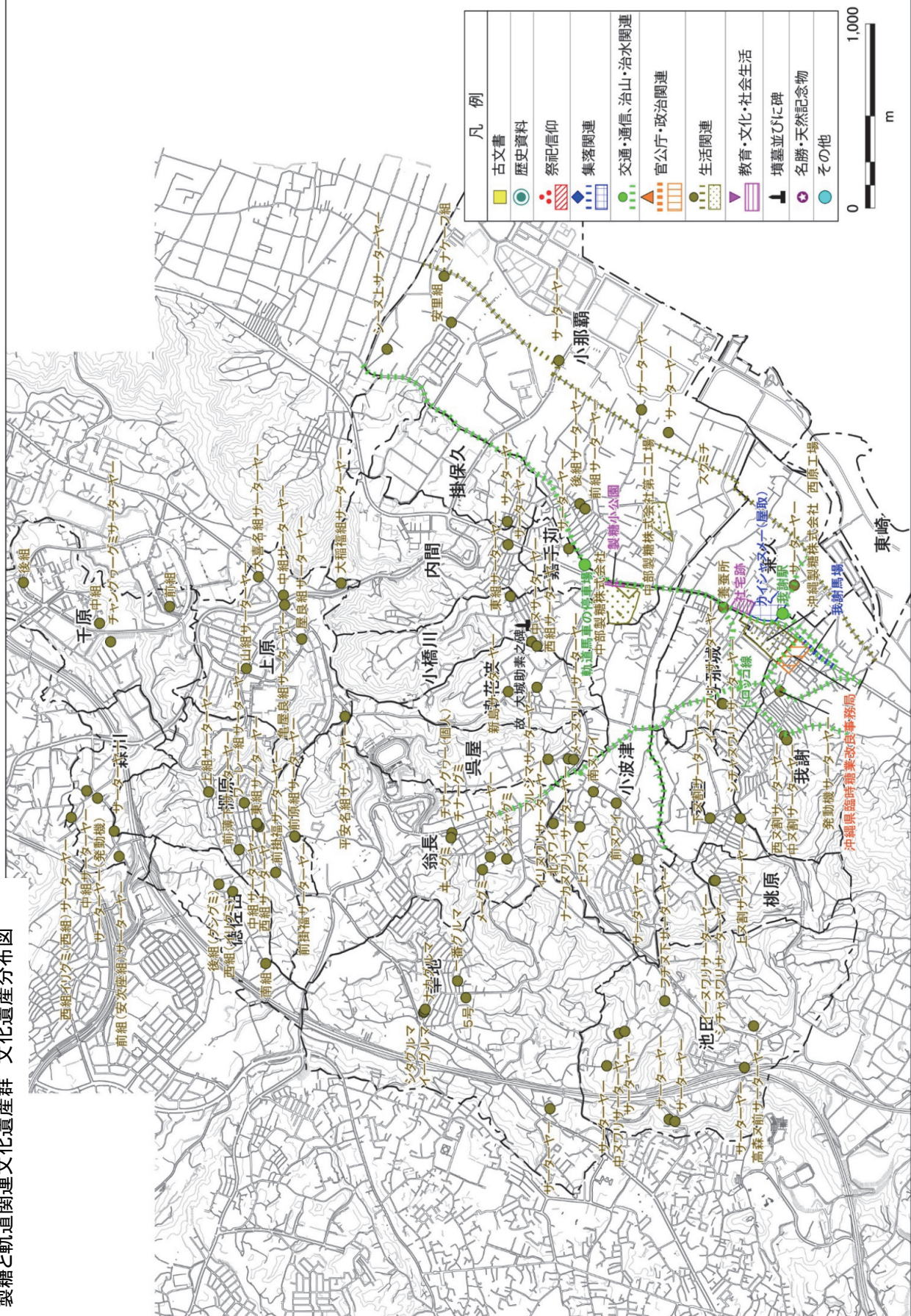
イ. サーターヤーの復元整備の推進

- 各字にあったサーターヤーを模型復元するなど、昔ながらの製糖体験や製糖業の歴史を学べるような施設の整備を検討する。

ウ. 軌道の道筋を活用した魅力創出と情報発信の推進

- かつて産業や生活の要として利用されていた歴史が分かるよう、軌道が通っていた道筋を活用し、モニュメントの設置や散策コースの設定、サイン整備、道路舗装の整備を検討する。
- 現在の道路と過去の道路が分かる模型を作成し、図書館などの町営施設で展示することで、西原町の道路の歴史を分かりやすく伝え、積極的に情報発信していく。
- 軌道ではないが、西原町では、古くは我謝の浜や小那覇の浜が港として使用され、海上交通の要となっていた。このような海の道についても、軌道同様に解説板の整備などを行い、広く周知していく。また、海に関する文化遺産を活用したクルーズなど観光活用への展開も検討する。

図 製糖と軌道関連文化遺産群 文化遺産分布図



(5) グスクの多様性関連文化遺産群

①ストーリー

西原町内では、幸地グスク、棚原グスク、津記武多グスク、イシグスクの4つのグスクが確認されており、石垣などの城郭を持たないいわゆる「土から成るグスク」も含まれます。このようなグスクの多様性がみられることも、西原町の歴史文化の特徴であることから、関連文化遺産として捉えます。

中城湾一帯は、肥沃なジャングル土壌が広がり、グスク時代に水田地帯として発展したと考えられています。三山を統一した尚巴志や護佐丸、阿麻和利、そして第二尚氏王統の始祖である金丸（尚円王）といった人物らが中城湾岸を領地としていたことから、稲作の生産力増大がその背景にあったと考えられ、それら関連市町村を結ぶ文化遺産群も視野に入れて活用していくことも考えていきます。

②主な文化遺産

グスクの多様性関連文化遺産群に関する主な文化遺産は、下表のとおりである。

表 主な文化遺産

名称	概要	写真
幸地グスク (幸地 102)	【分類】: 官公庁・政治関連 - 西原町の西部字幸地の標高115mの島尻泥岩からなる丘の上から中腹にかけて立地している。グスク内の最高地点には祠が建てられており、『琉球国由来記』には「幸地城之殿」が記載されている。 - 城主・熱田子の伝承が伝わる。 『西原町史 第5巻 西原の考古』では、幸地グスクについて、15世紀前半につくられ、首里と中城方面を結ぶ「峰道」がグスク内を通過することも特徴のひとつである。一種の関所的機能を持ち、戦時には道路を封鎖する目的でつくられたとも考えられる。 - 幸地グスクの特徴は、石垣を使用していない「土より成るグスク」であった可能性がある。土地が粘土質であったため、石垣を使用せずにグスクが築けたと考えられる。	
津記武多グスク (小波津 70)	【分類】: 官公庁・政治関連 - 字小波津小字世間田原にあり、小波津団地の西方標高60mの丘の上に立地している。 - グスクの石垣は首里城の築城の際に手渡しで運ばれたと伝わるが、現在のところ、根石や中込め石などグスクの石垣遺構が確認されていないため、もともと石垣のないいわゆる「土より成るグスク」だったと考えられる。	

名称	概要	写真
	津記武多グスクの城主・津記武多按司は、幸地グスクの城主・熱田子に滅ぼされたという。	
津記武多按司墓 (小波津)	【分類】: 墳墓並びに碑 津記武多グスクにあり、町内に住む今帰仁按司の子孫と伝わる門中が拝んでいる。	
ティラサガー (小波津 24)	【分類】: 生活関連 - 小波津集落より北東、県営西原団地の南側にあり、集落のウブガー(産井泉)である。この井泉は、どんな旱魃でも枯れたことがなく、以前まで小波津集落の共同井戸や、西原中学校の用水摂取池として使われていた。 『遺老説伝』によると、津記武多按司の夫人が、このティラサガーで髪を洗ったと記載されている。	
今帰仁ピラ (翁長)	【分類】: 官公庁・政治関連 幸地グスクの北方には小高い丘があり、今帰仁山と呼ばれていた。そこから北に下る急坂を今帰仁ピラといい、熱田之子の策略にかかって、今帰仁按司が闇討ちされた所という伝承がある。	—
今帰仁按司墓 (翁長 67)	【分類】: 墳墓並びに碑 - 幸地の熱田子と今帰仁軍との戦いで戦死した武将らが葬られていると伝わる。 - 地元ではサムレー墓と呼ばれ、正月の16日と3月のシーミーのときに拝んでいる。	—
棚原グスク (棚原 117)	【分類】: 官公庁・政治関連 - およそ14世紀～15世紀に属するグスク跡で、棚原集落の北北西約300mにあり、標高130～150mの石灰岩丘陵上に位置している。 『琉球国由来記』にみえる「棚原城之殿」の平場が、このグスクの主郭と思われる。平場の北から西および南側にかけて断崖となり、自然の難所をうまく利用して造ったグスクである。 - 平場の試掘調査では、グスク土器・輸入陶磁器・カンギクなどの遺物が出土している。 16世紀に編集された『おもろさうし』には、棚原グスクに支配者として君臨していた按司をたたえた謡が記されている。	
イシグスク (千原 36)	【分類】: 官公庁・政治関連 - 琉球大学農学部本館の西側約300mにある、石灰岩台地に立地している。石灰岩地帯特有の自然の断崖を利用して築かれたグスクで、棚原グスクの北の支城として築かれた可能性が高い。 - 沖縄戦においては、米軍には「ロッキークラッグ	

名称	概要	写真
	ス」、旧日本軍には「142高地」と呼ばれ、過酷な戦闘が繰り広げられた場所のひとつでもある。 2002年7月頃、民間の土地造成工事により大部分が破壊されてしまった。	
我謝遺跡 (我謝 75)	【分類】:官公庁・政治関連 - 我謝および与那城集落の背後、現在の西原ハイツの地に形成されていたグスク時代の遺跡。 「クガニムイ(黄金森)」や「ガージャモー(我謝森)」と呼ばれ、かつて我謝の殿があった。 - 約37,000㎡の広範囲な面積に遺物包含層が点在しており、1981～82年にかけ3次にわたり、大型宅地造成工事に伴う緊急発掘調査が実施された。出土した遺物はバリエーションに富む。 「与那城」が我謝遺跡であるとする説がある。	

名称後ろの数字は、文化遺産 ID である。

③今後の取組方針

ア. グスクおよび関連文化遺産の調査研究の推進

- 町内のグスクには、民間開発などによりすでに大部分が失われてしまったものや、縄張りや位置づけなどがはっきりしないものもあり、整備や活用のあり方を検討するためにも、調査研究・記録保存を促進する。

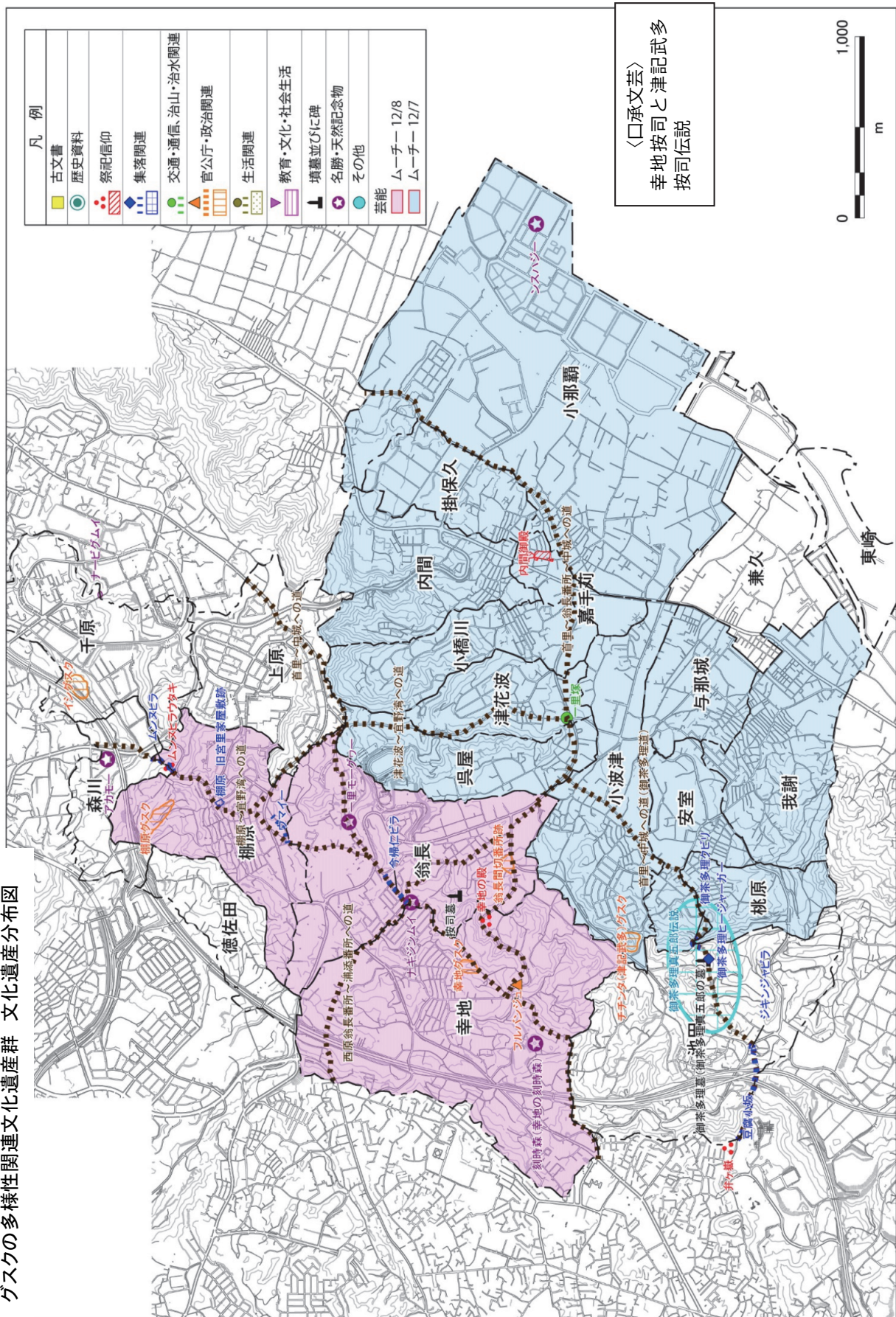
イ. 活用に向けた整備の推進

- 観光やグスクの多様性をレクチャーするなどの活用に向けて、誘導サインや解説板の設置、グスクおよび周辺環境の整備など、必要と考えられる整備を検討する。
- 幸地グスクのように地域の中心となることが想定されるグスクについては、地域住民が保存・活用しやすいよう、地域住民とともに整備のあり方を検討していく。

ウ. 散策コースの設定・情報発信の推進

- 現在、西原町の観光マップでは、幸地グスクや棚原グスクを起点とする散策コースが位置づけられており、このような散策コースについてさらに情報発信を行っていく。
- あわせて、グスクそのものの多様性を実感することができる全グスク巡りガイドコースなどのコース設定、ガイド内容の構築、案内ガイドの育成なども検討する。

図 ゲスクの多様性関連文化遺産分布図



表「保存活用区域」および「関連文化遺産群」の方針一覧

①幸地グスク周辺保存活用区域	宇幸地周辺は、幸地グスクという核となる文化遺産が所在し、番所跡や、首里と中城城跡を結ぶ歴史の道が残っている。西原間切は首里王府直轄地であるため同村はないが、幸地が拠点地区であったと考えられる。	ア. 域内文化遺産の調査研究の推進 イ. 活用・発信に向けた文化遺産整備の推進 ウ. 若い世代への歴史文化の継承の推進 エ. 地域で文化遺産を保存・活用する体制の構築 オ. 保存活用区域の情報発信（町内含む）の推進
②棚原区周辺保存活用区域	宇棚原は、浦添間切から編入されてきた集落であり、他の集落とは異なった歴史を有する。また、棚原のミルクなどの首里の影響が伺える独特な年中行事が継承されている。このことから、棚原区周辺地区はひとつのまとまりとして捉えることが重要である。	ア. 観光活用に向けた既存散策コースの情報発信・新規コースの整備 イ. 域内文化遺産の調査研究の推進 ウ. 石畳道など特徴的な文化遺産保全の推進 エ. 文化遺産の保存・活用に向けた体制の構築 オ. 他地域と連携した「ミルク」の情報発信の推進
③運玉森周辺保存活用区域	運玉森は、沖縄戦激戦地として戦争の記憶を伝え、同時に、西原町民の心の拠り所となっている。また、運玉義留などの民話も残されている。西原町の特徴として本構想においても特別な地域と考えられる。	ア. 運玉森周辺の景観保全の推進 イ. 「戦争の記憶」の継承の推進 ウ. 与那原町との連携強化 エ. 義賊・運玉義留ストーリーなど情報発信の推進
④金丸（尚円王）ゆかりの地 関連文化遺産群＋保存活用区域	西原町の代表的な文化遺産である国指定史跡「内間御殿」の所在する内間・嘉手刈集落を「重点区域」として核にしながらも、町内全域を金丸の暮らした足跡をたどる関連文化遺産群として捉える。	ア. 金丸（尚円王）に関する情報発信の推進 イ. 内間御殿など関係する文化遺産の復元整備の推進 ウ. 管理・活用団体の支援・設置 エ. 関係市町村との交流の促進 オ. 金丸（尚円王）をいかしたまちづくり・ひとづくりの推進
⑤戦争の記憶関連文化遺産群	西原町は沖縄戦における激戦地として、戦争の記憶と平和の大切さを伝える地域でもある。町内に所在する戦跡や言い伝えなど、戦争の記憶を受け継ぐための文化遺産を、ひとまとまりの関連文化遺産群として捉える。	ア. 文化遺産活用に向けた調査・整備・公開の推進 イ. 町内児童・生徒・学生向け平和学習への積極的活用の推進 ウ. 町外の平和学習ツアーなどへの活用の推進 エ. 宮野湾市・浦添市と連携した沖縄戦の歴史継承の推進 オ. 解説本・ガイドマップなどの作成・情報発信の推進
⑥稲作とまつり関連文化遺産群	穀倉地帯であった西原町の特徴を踏まえ、町内全域で行われている獅子舞や八月遊び、小波津の棒、棚原のミルクといった現在も伝承されている芸能や民俗行事を、ひとつの関連文化遺産群として捉える。	ア. 関連文化遺産の整備・修復・記録保存の推進 イ. 芸能保存会などを中心とした継承・活性化の支援 ウ. 伝統芸能アーカイブの作成 エ. 年間を通じた祭祀や行事の魅力発信の推進
⑦製糖と軌道関連文化遺産群	戦前より製糖工場が所在していたことや、製糖業と関連して軌道が開通されたことを特徴と捉え、関係する文化遺産をひとつの関連文化遺産群として捉える。	ア. 大城助素を活用した糖業に関する歴史継承の推進 イ. サーターヤの復元整備の推進 ウ. 軌道の道筋を活用した魅力創出と情報発信の推進
⑧グスクの多様性関連文化遺産群	西原町内のグスクには、石垣などの城郭を持たない「土から成るグスク」も含まれる。このようなグスクの多様性を知ることができることも、西原町の歴史文化の特徴であることから、関連文化遺産群として捉える。	ア. グスクおよび関連文化遺産の調査研究の推進 イ. 活用に向けた整備の推進 ウ. 散策コースの設定・情報発信の推進

5. 今後の予定（事業スケジュール）

（1）事業スケジュール

本構想は、事業年度である 2016 年度の現状を踏まえて取りまとめたものであるが、計画内容については社会情勢の変化や文化遺産を取り巻く状況の変化が予想されるため、おおむね 10 年をめどに見直しを行うことを検討する。

本構想で位置づけた保存活用区域および関連文化遺産群については、今後、それぞれの関連する地域を舞台に事業を展開していくことになる。本事業では「幸地グスク周辺保存活用区域」と「金丸（尚円王）ゆかりの地関連文化遺産群＋保存活用区域」において、モデル地域として個別の保存活用計画をとりまとめた。その他の保存活用区域および関連文化遺産群についても、個別の保存活用計画を位置づけ、それぞれの方策の実現を目指す。

方策実現の主体は、必ずしも生涯学習課に限らず、関係課や町民・地域住民主体の取組があれば、そこに本構想の考え方を積極的に反映してもらう形で進めていくことが望ましい。

次ページに示した事業スケジュールは現段階の予定であり、詳しくは対象地域との調整を行いながら個別計画で位置づけていく。

表 事業スケジュール

項目	2016年	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目	8年目	9年目	10年目
町内文化遺産全般の保存・活用	継続実施										
保存活用計画および関連文化遺産群の追加指定等	要望等をききながら適宜実施										
保存活用区域・関連文化遺産群における取組											
①幸地グスク周辺保存活用区域	個別計画の策定	サイン整備計画の策定	サイン整備計画の策定	推進活動の実施							
②棚原区周辺保存活用区域	個別計画の策定	個別計画の策定	サイン整備計画の策定	推進活動の実施							
③連玉森周辺保存活用区域			景観等関係部局との調整	推進活動の実施							
④金丸(尚円王)ゆかりの地関連文化遺産群＋保存活用区域	個別計画の策定		サイン整備計画の策定	推進活動の実施							
⑤戦争の記憶関連文化遺産群				デジタル・アーカイブの作成							
⑥稲作とまつり関連文化遺産群				デジタル・アーカイブの作成							
⑦製糖と軌道関連文化遺産群				関係部局との調整							
⑧グスクの多様性関連文化遺産群				推進活動の実施							

※緑色：一括交付金を活用して実施予定／オレンジ色：文化庁予算などを活用して実施予定